

言語習得研究と英語教育の新展開（上）

— 「時制」「相」の思考実験を指導に生かす

New Development of English Teaching and Language Acquisition
through Thought Experiment of TENSE and ASPECT (1)

寺島 隆吉（岐阜大学）

TERASIMA Takayosi

後藤 幸子（岩野田中学校）

GOTOH Sachiko

はじめに

- 1 研究の動機と概要
 - 1-1 気づき
 - 1-2 大学院で学んだこと
 - 1-3 記号研との出会い
 - 1-4 研究テーマの決定
 - 1-4-1 英語の「幹」と「枝葉」
 - 1-4-2 日本語の学力と英語の学力
 - 1-4-3 身につけさせたい技術
 - 1-4-4 習得順序と生徒のつまづき
 - 1-5 研究の概要
- 2 中学校での調査
 - 2-1 動詞の変化のみを丸暗記したのでは見えてこないもの
 - 2-1-1 動詞の知識
 - 2-1-2 TENSE・ASPECTの意識の欠落から
 - 2-2 生徒の理解をより確かなものにする授業を目指して
 - 2-2-1 単純形について
 - 2-2-2 現在完了形について
 - 2-3 中学生に行うアンケート用紙
 - 2-3-1 A表を作成する
 - 2-3-2 Aの別表を作成してみたが・・・
 - 2-3-3 B表を作成する
 - 2-3-4 打ち合わせ
 - 2-4 調査用紙回収
 - 2-4-1 調査実施
 - 2-4-2 A表回答欄の番号付け
 - 2-4-3 誤答者数（1）（2）（3）
 - 2-4-4 誤答例と誤答数
 - 2-5 A表の累計を終えて
 - 2-5-1 間違いが多い順
 - 2-5-2 個体発生は系統発生を繰り返す
 - 2-5-3 無回答が少なかった項目と無回答が多かった項目
 - 2-6 B表の集計を終えて
 - 2-6-1 誤答者数の調査結果
 - 2-6-2 誤答例と誤答数
 - 2-6-3 スペリングミスを除いた間違いが多い順
 - 2-6-4 B表の全体に関わって
 - 2-7 言語習得研究との比較
 - 2-7-1 A表の調査結果について
 - 2-7-2 B表の調査結果について
 - 2-7-3 調査結果の全体について
- 3 中間総括 — この調査から今後の指導に生かしていきたいこと

以下（下）に続く。

- 4 東濃高校での調査
- 5 郡上高校での調査
- 6 高校生のまとめ
- 7 中学生と高校生のまとめ

おわりに
参考文献

はじめに

以下は、後藤幸子氏が現職教員として岐阜大学教育学部大学院に入学し、教科教育専攻英語教育専修の大学院生としてまとめた修士論文に寺島隆吉が加筆修正を加えたものである。ESLとしての英語教育ではなくEFLとしての英語教育という環境で、詳細な調査を元に、従来の言語習得論を検証し直したものであり（また調査対象者数の多さから言っても）従来にはない極めて貴重な研究になったのではないかと考える。

なお既に上記で述べたとおり、本論文では、従来の言語習得研究では見られなかった貴重なデータが豊富に蓄積されている。しかしデータとしては極めて貴重であるにもかかわらず各項目の考察が必ずしも十分に掘り下げられていない点に本論文の弱さがあるように思われた。そこで寺島の加筆修正は主としてこの「考察」を深めることに費やされた。「考察」がワン・パラグラフしかないものも少なくなかったのだが、それを最低は三つのパラグラフになるように考察を付け加えたのである。

また、その際、後藤氏の意図がより鮮明に読み手に伝わるように、節の構成や小見出しの付け方にも大きな修正を加えたところがある。さらに時には、省いた方が論旨が明晰になり、読み手にとっても有り難いのではないかと判断して削除した箇所もある。しかしいづれにしても、以上の加筆修正（あるいは削除）によって、本論文は名実共に後藤氏と寺島の共著論文にふさわしいものとなったと確信している。

この研究をもとにシラバス・授業計画をたてれば、中学や高校で授業をする場合、文法指導の見通しがはるかに遠く広くなり、生徒との無用な摩擦を避けることができるようになるのではないかと考える。なぜなら「なぜ生徒はこんな簡単な間違いをするのか」と驚きあきれる以前に、実はそれが言語習得順序にしたがった「正しい間違い」だということが分かり、教師も今までの肩肘張った指導から解放され、ゆったりとした気持ちで教壇に立つことができると思われるからである。

1 研究の動機と概要

1-1 気づき

この研究について書き始める前に、ひとりの英語教師として自分がどのような疑問を抱いていたのか、そしてどんな気づきがあったのかということから、大学院で学んだこと、そしてこの研究テーマの決定にいたるまでの動機をまとめてみたいと思う。

私が中学校の英語教師になった最初のおよそ10年間は、生徒に英語の力をつけさせるべく、たくさんの研究会や授業を参観して自分の教授法を鍛えてきた。自分が良いと思った活動や教授法はすぐに取り入れ、それを真似たり自分なりに改善したりするなどして、指導の技術を磨いてきたつもりであった。しかし近年いくつかの疑問を抱くようになってきた。

ひとつ目は、どんなに話す練習をさせても書く練習をさせても生徒に思うように力をつけさせてやれないのはなぜだろう、ということであった。英語が得意な生徒は单元ごとによく話せてよく書くことができるようになり、既習の文法や語彙を使って会話の内容をふくらませたり、自分の思いを簡単な英語で表現したりすることができるようになった。しかし実際はその場だけの会話文をスラスラと話せているだけで本質的な英語力がついていないのではないかと、感じるが多かった。またそれまでのような活動では、英語が苦手な生徒に充実感を持たせることがなかなかできずに、「分かるようになった」という喜びを感じさせてあげられなかった。

二つ目は、教科書どおりの授業で英語の学習は十分なのだろうか、という疑問であった。教科書の内容は何年かごとに変わり、最近では「英語が話せる日本人」になるようにと会話文が多い。しかし会話文は主語が無く、中学1年生でも難しい表現を使って買い物をする場面があったり道案内をしたりする場面がある。だがそれらの会話文をどんなにたくさん覚えたとしても、英語の長文を読む力には直結し難いし、EFLの環境では使ってみる場が限られているので結局は忘れてしまう。だから、

会話文では思うように学力をつけてあげることができないのではないかと思うようになった。

三つ目に、より効果的に英語力を身につけさせる教授法はないのだろうか、ということであった。研究授業で、見た目には華やかに会話をさせているような授業や、いかにも自分の意見をスラスラと書いているような授業を見たことがある。しかしそれは表面上の活動ではないだろうか。単元ごとにいろいろな活動を組み合わせているだけで、一貫した教授法で貫かれているわけではないので、断片的な知識しかついていないのではないのだろうか。では効果的に英語の力をつけさせる教授法とは一体どんなものがあるのだろうか。そして中学校だけにとどまらず、高校や大学の英語の基礎となる確固とした理論に基づいた教授法は無いのだろうかと思うようになった。

そこで岐阜大学大学院で、もっと英語の教授法について学び、英語教師として自信と信念を持って教壇に立ちたいと強く思うようになり、入学を決意した。

1-2 大学院で学んだこと

中学校に長く勤務していると、教科書には易しい会話文しか載っていないので、自ら求めなければ難しい英語の文章や長文を読む機会がない。大学院1年生の前期は、自分の英語力や指導力をブラッシュアップするよい機会となった。それまではなかなか本を読む時間さえとることができなかったので、専門書をいくつかじっくりと読み、知識を高めることができた。以下は自分が英語力を高めることができたり、教授法などについて新しい知識を得ることができたりした著書である。

大津由起雄『英語学習7つの誤解』NHK出版

金谷憲『英語リーディング論』桐原書店

金谷憲『和訳先渡し授業の試み』三省堂

寺島隆吉『英語教育原論』明石書店

村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店

福田誠治『競争やめたら学力世界一』朝日新聞社

Ellis, Rod *Second Language Acquisition*. Oxford

Hofman, Th. R. *10 Voyages in the Realms of Meaning*. Kuroosio

上記の本に書いてあったようなことを、これまでの実践でいくつか体得していた。そして実際に現場にいたからこそ分かる表現などもあった。中学校では研究授業を行い、その意見交流をする機会が年に何度かあるが、理論や教授法を基にして話し合っているわけではなかった。しかし今後は身につけた知識をふまえて意見を言うことができそうだ。

1-3 記号研との出会い

自分にとって一番大きな学びは、寺島教授の授業を受けたことや寺島教授の著書を読んだことであった。また記号研との出会いも、英語教師としての人生を変えてくれた。

寺島隆吉『国際理解の歩き方』では、アメリカという大国の存在について考えさせられた。日本とアメリカがどのような関係にあるのか、またアメリカがどのような国にどのような影響を及ぼしているのかを知れば知るほど、日本の政治についても開眼していくようであった。

寺島隆吉『英語にとって評価とは何か』では、これまでの自分の評価のつけ方や考え方がいかに曖昧であったかと反省させられた。どのような評価が生徒のモチベーションをあげるのか、この本にはヒントがたくさん詰まっていた。大学院2年生で現場に戻り、実際に中学校で再び教鞭を取ってからは「量」を書く指導や「関心・意欲・態度」の評価について、多くを取り入れている。

英語の授業が週3時間になってから、英語の歌を授業中に扱うことをやめていたのだが、英語の歌を復活させるきっかけとなったのが寺島隆吉『英語にとって音声とは何か』である。以前に英語の歌をやっていたときにはただ歌わせただけであったが、歌を導入することがこれほどまでに英語の力を

つけるのに有効な手段だとは思わなかった。中学校1年生でも毎時間の授業で、下の3冊の英語の歌が歌えるようになった。

寺島隆吉 (編) 『Singing Out Vol.1』三友社出版

寺島隆吉 (編) 『Singing Out Vol.2』三友社出版

寺島隆吉 (編) 『Singing Out Vol.3』三友社出版

実際に授業で歌を導入するときには、さらに寺島美紀子『STORY OF A SONG の授業 (授業の工夫6)』を参考にしている。寺島隆吉『英語にとって音声とは何か』からは英語の歌だけでなく、教科書本文を「リズム読み」する技術を学んだ。これも実際に授業で取り入れ、棒読みになりがちな文章を、楽しく自然に強弱をつけて読ませる手段として欠かすことができなくなっている。

そして全ての生徒が自分の力で英語の日本語訳ができるように、と始めたのが記号研方式である。教科書本文に記号をつけ、語順訳・立ち止まり訳・日本語訳をさせている。その指導をするためのプリント作りの技術を支えてくれているのが寺島隆吉『英語記号づけ入門』である。教科書の本文が長くなってくる3年生頃からは、「構造よみ」や「主題読み」にも挑戦させていきたいと考えている。そして教科書だけでなく、下記のようなワークブックでさらに英文読解の力をつけさせたいと今から構想を練っている。

寺島隆吉 (編) 『大きなかぶ』三友社出版

寺島隆吉 (編) 『ジャックの建てた家』三友社出版

寺島隆吉・寺島美紀子 (編) 『魔法の英語』あすなろ社／三友社出版

最後に、英語教師としての自分を根幹から支えてくれているのが次の4冊である。この4冊は、以下の本論文でも何度か引用することになる。

寺島隆吉『英語にとって学力とは何か』三友社出版

寺島隆吉『英語にとって文法とは何か』あすなろ社／三友社出版

寺島美紀子『英語授業への挑戦』三友社出版

寺島美紀子『英語直読直解への挑戦』あすなろ社／三友社出版

1-4 研究テーマの決定

1-4-1 英語の「幹」と「枝葉」

大学院での研究は、中学校での英語の授業で役に立つものにしたいと決めていた。また、これまでの自分の疑問が解決できるものにしたいとも考えていた。

あるとき寺島教授の授業で、「本当に生徒に学ばせなければならない木に例えると幹の部分がある。しかし英語教育の現状を見ると、枝葉の部分ばかりを教えている」と言われた。寺島美紀子『英語授業への挑戦』では、次のように書かれている。

要するに「枝葉」は難しいから定着せず、他方「幹」はきちんと教えられていないから、何が幹かもわからず、結局落ちこぼれていくというのである。その意味で、いま最も求められているのは、教えなくてもよい枝葉をはっきりさせ、それを大胆に切り捨てる勇気ではないだろうか。(p.24)

これまで中学生に一生懸命に教えていたことが枝葉の部分ばかりだったような気がした。幹がしっかりとしていなければ、枝葉は生い茂らない。何が「幹」で何が「枝葉」なのか。それを知らずして英語の授業は成り立つはずがない。

1-4-2 日本語の学力と英語の学力

EFLの環境では、全く日本語を介さずに英語を教えるのは無駄でもあり無理でもある。しかしその日本語による文法用語が英語を教えるときの支障になっていないだろうか。また日本語が不十分な

生徒に英語を教えるとき、どのようなことに気をつけなければならないのだろうか。

英語教師が句型を教えるとき、「主語＋動詞」とか、「名詞」「形容詞」「副詞」などのように品詞を使って説明している。しかし中学生はこれらの言葉を理解できているのだろうか。単語を見て、すぐに品詞が言えるのだろうか。きっとほとんどの生徒が言えないだろう。ではなぜそんな用語を使って説明するのだろうか。他に良い方法が無いからである。結局はここにぶちあたる。

そして日本語に訳すときに日本語らしい訳にすればするほど、その英文が浮かんでこなくなるほど文章が変わってくることもある。そんな訳をしていたらやっぱり「英語は難しい」と思わせてしまうだろう。日本語の力がなければ、日本語らしい訳なんて到底無理である。寺島隆吉『英語にとって学力とは何か』(p.13)では次のように述べている。

よく「易しい英語で話さない」とか、「会話やある程度の作文は中学程度の英語力で十分です」とかいう話をあちこちで耳にするが、ことはそれほど単純ではない。実は頭の中で、自分の言いたいことを易しい日本語に言い変えることがすぐに（あるいは簡単に）できるかどうか問われているのである。それは英語力ではなく、実は日本語力そのものである。

外国語の力は母国語を上回ることができない。ヴィゴツキーは『思考と言語』で「外国語の習得は母語の発達の一定の水準に依拠する」と言っている。国語ができないから英語もできないのだと、教える側がお手上げになるのではなく、母国語の力をも同時につけていってやりたいのである。『英語にとって学力とは何か』から学んだのは、このことである。

1-4-3 身につけさせたい技術

英語の文章は、長くなればなるほど「美しい日本語」「こなれた日本語」に直すのが難しい。「後ろから訳せ」と言われるように、英語とは語順が異なるために「訳す技術」をもたなければならなくなる。常に「後ろから訳す」なら分かりやすいが、時には前後させて訳さなければならない。

この「美しい日本語に訳す」という作業は、徹底して身につけなければならないものだろうか。話されている英語を聞くときにいちいちそんなことを頭の中でやっていたら、何も聞けずに終わってしまう。本当に身につけなければならない技術は、前から訳して意味が取れることではないだろうか。

その答えとなる教授法が「記号研方式」であった。これを身につけることの方が絶対に英語の力になる。もう「後ろから訳す」技術に時間を費やす必要はない。寺島美紀子『英語「直読直解」への挑戦』は、SIM方式などと比較しながら、この方法・技術を詳しく解説してくれていた。

1-4-4 習得順序と生徒のつまずき

「教科書の文法の配列と、第二言語の習得順序は一致していない」という言葉を耳にしたことがある。しかし教科書の文法の配列はどうすることもできないのだろうか。もしそうならば、生徒のつまずきを最小限に抑えることができる方法はないのだろうか。また自分は生徒のつまずきについてどれほど知っているのだろうか。そんな疑問を持った。

そこで、寺島隆吉『英語にとって文法とは何か』にある次表(p.164)を中学校の生徒に書き込ませて練習させてはどうかと思った。というのは、英語単文の心臓部は述語動詞であり、この述語動詞の「単純形」「進行形」「完了形」の形式と内容が習得されていない限り、英語を「話す」ことも「書く」ことも不可能だからである。

		肯定	否定	疑問
単純形	①現在	He plays tennis every day.		
	②過去			
	③未来			
進行形	①現在			
	②過去			

	③未来			
完了形	①現在			
	②過去			
	③未来			
完了進行形	①現在			
	②過去			
	③未来			

寺島隆吉『英語にとって文法とは何か』(pp.163-164)によれば、この表から次のようなことが分かるという。

ところでTense とAspectのどちらを先に教えるかとなるとかなりむずかしい問題が出てくる。なぜならAspectだけから成る教材というのはちょっと想像できないからである。しかし言語習得順序からいうと(中略)、進行形の方が過去よりも早い(三人称・単数・現在の-sなどは最後に近い)。Krashenらの研究に接する以前から、私は次のような調査から[上記の表] TenseよりもAspectの方が生徒にとってやさしいことを知っていた。というのは定時制高校にいた頃、むずかしい学力調査をするかわりに、別紙のような問題用紙を与え、He plays tennis every day. という基本文を書きかえさせる作業を毎年やらせてみていたからである。問題用紙にはご覧のとおり、未来・進行形などをつくり出す<公式>とbe・haveなどの<活用形>がすべてヒントとして与えられていた。にもかかわらず生徒の一番できの悪かったのが単純形、とりわけその疑問・否定であった。

寺島教授が行っていたのは定時制ではあったが高校生である。では中学生にも同じものをやらせたら、どのような結果になるのだろうか。そして調査から得た誤答から、何かしらの指導のヒントを得ることができるのではないだろうか、と思った。

こうして『英語にとって文法とは何か』のp.164にある表(以下、「時相(時制と相) 転換表と呼ぶ」)を用いての調査を始めることとなった。

1-5 研究の概要

自分がこれからひとりの英語教師として英語を生徒に教えていくために、何を一番きちんと身につけさせるべきなのかを知っていなければならない。

それを知ることで、生徒により分かりやすい授業を提供することができ、生徒のつまずきを極力減らしていくこともできるはずである。そのために「時相転換表」を中学生と高校生にやってもらい、その誤答や誤答数を表にして分析する。

その結果から、生徒が苦手としている部分が浮き彫りになり、どのような間違いに陥りやすいのか、その傾向を知ることができる。さらにこれまでのいくつかの習得順序に関する研究について、それらの正しかった部分を証明し、さらには新たな発見もできると考えている。

この研究では中学生と高校生(15才~18才)の273人の被験者に「時相転換表」を書いてもらい、分析した。そして実態を把握することができた。以下、中学校での調査、高等学校での調査(東濃高等学校、郡上高等学校、高校生のまとめ)、中学校と高等学校のまとめ、の順に書いていくつもりである。

2 中学校での調査

2-1 動詞の変化のみを丸暗記したのでは見えてこないもの

ところで「時相転換表」を生徒にやらせてみることは、英語授業のフィードバックにもなる。英語教師の偏った知識や間違った教え方などが分かったり、生徒の理解が十分に得られていないのに次へ

進んでしまったりなど、いろいろなことがその結果から見えてくるものとする。

はたしてこの「時相転換表」を中学生ではどれくらいできるものなのだろうか。この表を完成するのは、初めは簡単のように見えた。というのも、自分が教えられてきた（教えてきた）文法（動詞の変化のみを捕らえるもの）で容易に完成できると思ったからである。動詞の変化のみで文章をつくと、下の表のようになる。

① 現在	He <i>plays</i> tennis.
② 過去	He <i>played</i> tennis.
③ 未来	He <i>will play</i> tennis.
④ 現在進行形	He <i>is playing</i> tennis.
⑤ 過去進行形	He <i>was playing</i> tennis.
⑥ 未来進行形	He <i>will be playing</i> tennis.
⑦ 現在完了形	He <i>has played</i> tennis.
⑧ 過去完了形	He <i>had played</i> tennis.
⑨ 未来完了形	He <i>will have played</i> tennis.
⑩ 現在完了進行形	He <i>has been playing</i> tennis.
⑪ 過去完了進行形	He <i>had been playing</i> tennis.
⑫ 未来完了進行形	He <i>will have been playing</i> tennis.

難しいのはこれらの文に副詞（句・節）を付け加えることにあった。私はplayという動詞の特徴や、TENSE・ASPECTについて深く考えることもなく表を完成させていた。通常はその文章から、その文章が表す情景（時間、場所、人物、動作など）を思い描くことができる。

しかし自分が書いた文章を読み返してみるといくつかの文章からはその情景が浮かばないもの（文章が言葉足らずで、情景を思い描くことが出来ない）があった。たとえば、He *plays* tennis.は、every dayのような副詞句を付け足さなければ、これだけでは意味をなさない。

ということは、それぞれの動詞のみを変化させただけでは成立し難い文章ができあがってしまうのである。要するに動詞を単に変化させるだけでは、それぞれの文章が持つcontextを全く考慮していない文を作り上げてしまうことになる、ということに気づいた。

これまで文法については「知っている」つもりであったが、実はなんと表面だけのものであったか、ということを実感させられた。そして、そのように文法そのものを軽く考える教師から受けた文法の授業は、生徒に真の知識を十分に与えず、もしかしたら生徒の理解に混乱を招いていたのかもしれないと思った。

以下、表を完成させるにあたって自分の知識不足を感じたところについて述べようと思う。寺島隆吉『英語にとって文法とは何か』を読み直して改めて発見したことが中心である。

2-1-1 動詞の知識

授業中に使用する動詞についての知識が薄いものであったために、後に述べるTENSEやASPECTの面からの捉え方も弱いものになってしまっていた。動詞の現在というのはさまざまな意味合いを含んでいて、実に複雑である。ここでは前掲書『英語にとって文法とは何か』（p.127～p.130）を引用しながら書いていこうと思う。

動詞の現在（とりわけ動作動詞の現在）は、「現在」の動作を示してはいない。なぜならいま進行中の動作を示すのは現在進行形であって、現在は「習慣」や「真理」を表すからである。（以下p.163 Notesより）このことから動詞の単純形というのは、進行形や完了形のような複合形と比べて意味が単純というわけではないということがわかる。とりわけ現在というのは「習慣」「真理」「劇的現在」「未来」など多様な意味を表す。それに比べて過去の示す意味は過去時における「事実（習慣も含めて）」「状態」にほぼ限られている。

	現在	進行形	完了形	完了進行形
動作動詞	習慣など	動作の一時的継続	結果など	継続
状態動詞	状態の継続		継続	

またこの表で現在を「過去」にすれば、この欄の進行形・完了形・完了進行形はすべて過去進行形・過去完了形、過去完了進行形の意味として通用する。これは未来についても同じ。

以上のことから、時相転換表で使うplayは動作動詞であり、状態動詞と違ってそれぞれの形によって意味がはっきりとしてくることがわかった。またそれぞれの動詞の種類を知ること、その動詞の特徴にしたがって文章を作ることができることもわかった。例えば現在進行形の文章を作る場合に、むやみやたらと動詞を入れ替えることができないということである。

My father is dying now. (死にかけている)

My uncle is coming tomorrow. (来る予定)

*John is having a good car. → John has a good car.

現在進行形に関わらず、動詞によってはその文脈では使われない場合があり、非文になることがある。そのため文法を教える側には、どの文法事項ではどの動詞を使って教授すると良いのか(どの動詞は使ってはならないのか)をはっきりとさせておく必要がある。

2-1-2 TENSE・ASPECTの意識の欠落から

先述のとおり、時相転換表の中で、動詞を変化させただけでは文章として成立しない。したがってTENSEとASPECTは切り離して考えることは難しい。文章というのは常に文脈があって成り立っているからである。前後関係があって、話し手が聞き手に発話するのであるから、話し手の指す「ある場面や状況」というはその文法でしか表すことができない状況がある。

だから上記のような単なる動詞の変化のみを丸暗記するような文法しか身につけていないと、文脈を無視した文章を作ってしまうことになる。時相転換表ではplayを用いているが、playは「動作動詞」で、その現在は「習慣」を表す。したがって現在を使うのであれば、どんな場面を聞き手に発話するか、というイメージを頭の中で膨らまさないといけない。

また「テニスをする」という人間の行動には時間的に限りがあり、不自然な時間帯を作らないようにも配慮しなければならない。①～⑫の文章で、特にこれらの上に気をつけないといけないのは⑧過去完了形、⑨未来完了形、⑩過去完了進行形、⑪未来完了進行形、であろう。この4つは、副詞を付け加える場合に、その副詞が節として加えられなければならないからである。

例 ⑧He had played tennis when I arrived at the tennis court.

⑨He will have played tennis by the time you come back.

⑩When it started to rain heavily, he had been playing tennis for two hours.

⑪He will have been playing tennis for two hours by the time his wife comes back.

上記の例文の下線部のように、副詞句(節)をつけないと、その文が表現しようとする意味が不十分になってしまうのである。しかし、⑧⑨も、次のようにしないと、英文としてはまだ不自然さが残っているような気がする。

例 ⑧He had finished playing tennis when I arrived at the tennis court.

⑨He will have started playing tennis by the time you come back.

2-2 生徒の理解をより確かなものにする授業を目指して

時相転換表を生徒に書かせると、あらかじめ生徒の間違いを予想することが出来る。例えばHe plays tennis every day.の否定文を書かせる場合、次のような誤用が予測される。

He is not play tennis every day.

He do not play tennis every day.

He does not plays tennis every day.

もちろん、これらを組み合わせたような答えも考えられる。これまでは「予想される間違いをさせないような授業を展開する」という研究をしてこなかったし、テストなどの前にこのような間違いをするであろうと予想していても、上手く補ってあげられるような授業をすることができなかった。そこで、生徒が間違いを起させないように、文法をどのように捉えて教えるとよいのか、自分にTENSEやASPECTについて、どのような考え方や知識が足りなかったのか、ということ以下に考えてみようと思う。

2-2-1 単純形について

単純形の現在での間違いのひとつに、do→doesの変換ができていないことがあげられる。英語教師が中学生に一般動詞の疑問文を教える際によく使われる言葉がある。それは「be動詞が無いときのオタスケマンのdo (ドゥ)」とか「ドラえもののdo (ド)」というものである。

これなら中学生でも覚えやすいかもしれない、という発想で教師は使っているが、歴史の年号覚えよりも意味が無いと思われる(歴史の年号はその事件の内容にゴロを合わせているが、この場合は少々無理があるように思われる)。

中学1年生の1学期に教えるということから、文法の初歩としてこのような表現が親しみやすいのかもしれない。しかし生徒がいつまでもこの覚え方をしていると、他の文法との関連や文法の論理的な思考が育たず、知識レベルを向上させることはできない。

ではどのように教えれば、この一般動詞は定着し、高校へ進学した際の知識の基礎となるのだろうか。その答えは「2. 動詞の記号づけ」(寺島隆吉『英語にとって学力とは何か』第5章 第2節)にあった。

これを読んでいた時に、「これだ!」と思った。「この考え方はすごい! 学力が高い生徒には、助動詞を教え終わった際に(中学2年生)、ぜひこれを補足として教えておきたい!」と思ったのである。一般動詞のことなのにどうして助動詞を教えた後に補足したいのかということも、同時にこの本には書かれている。ここでその引用(pp.178-179)を載せる。

私が初めて記号づけをやり始めた頃は、my four little children (will) one day (live) in a nation where...のように、助動詞も本動詞も「丸」でかこんでいた。しかし最近では (will) one day (live) のように助動詞・本動詞をおのおの「半丸」でかこむようにしている。この実践を始めたのは寺島美紀子(1985)であるが、その動機は「will live全体でひとつの動詞句である」という素朴なものであった。が、いざやってみるといくつかの点で大きな意味があることがわかってきた。

その第1は半丸の記号を書き込むことによって、自分の手と眼で動詞句の構造を確認できることである。変形文法ではVP→V+[NP]とするが、私の場合、VP→[Aux]+Vとすることは先に述べた。これをさらに詳しくみると、次の6種類になる。

- ①be動詞単独, ②一般動詞単独, ③助動詞+原形
④be+~ing, ⑤have +~ed, ⑥be+~ed

しかし生徒にこの6種類の型をあらかじめ教えておく必要はない。むしろ、上記の半丸記号を書き込む中で、動詞句にはいろいろの型があることを生徒たちに学ばせ、最終的には上記の6種類しかないことを、帰納的に発見させていく方が、はるかに知的興奮をさそうものとなる。

さらに、...where they (will) not (be judged) by... のように記号づけることによって、①上記の6種類だけでなく、その合成形もあること、②また、その6種類および合成形も、結局、(VP)→(Aux)+(V)となっていること、も明らかにできるのである。

第2に以上のことと関連していることであるが、次の例のように、この半丸記号を書き込むことにより、頻度の副詞や否定の副詞がどこに位置するかをはっきりつかむことができる。またそれだけでなく疑問文のつくり方も否定文のつくり方と関連させて視覚的に教えることができる。

(4) My four little children (will) always (live) in a nation where...

(5) My four little children (will) not (live) in a nation where...

(6) (Will) my four little children (live) in a nation where...?

このように半丸記号の前半部（左半丸）を文頭に出しさえすれば、進行形であろうが完了形であろうが、疑問文になり、半丸記号の「割れ目」にnotをおけば、否定文になるわけである。つまり記号づけさえきちんとできれば、疑問文や否定文は簡単につくれることになる。むしろ難しいのは（形は単純だが）一般動詞単独の型ということになる。しかしその場合も、次のように、 ϕ 記号（零記号）のところに、do が常に省略されているのだと教えておけば、この問題も容易に解決できる。

(7) My four little children (ϕ) (live) in a nation where...

→ My four little children (do) (live) in a nation where...

この裏に隠れていたdoは、動詞を強めたい時に、(8)のように表に姿をあらわすのである。

(8) My four little children (do) (live) in a nation where...

(9) My four little children (do) not (live) in a nation where...

(10) (Do) my little children (live) in a nation where...? (pp.178-179)

上記のように、「(VP)→(Aux)+Vをもとにして、 ϕ のところにdoが常に省略されている」という考え方は、doが動詞の意味を強調する場合や、助動詞とそれらの疑問文・否定文を考える場合などで、パズルのピースを動かしているかのようにはっきりと整理されて頭に入れることができる。

また、「ドラえもののdo (ド)」などと、意味不明な教え方をしなくてもすむ。すでに「ドラえもののdo (ド)」と教えてしまった生徒の全てに、これを新たに理解させることは難しいかもしれないが、記号づけを中学1年生の最初から導入しているのならば、記号を見れば抵抗無く理解できると思われる。

というよりも、これは「動詞」というものの考え方の基礎であって、この考え方を最初に教えさえすれば、一生、動詞について教え直すことはないのである。これは英語教師の私にとって驚異的な発見であった。

2-2-2 現在完了形について

現在完了形は中学3年生で習うが、完了形をきちんと理解できる生徒はどれくらいいるだろうか、と思う。まず完了形という言葉が難しく、その上4用法（完了、結果、継続、経験）がある。そしてsince, for, once, ever, never, just, yet, alreadyなどの前置詞や副詞（文頭、文中、文尾）を使い分けなければならない（逆に言えばこの副詞があるからこそ和訳しやすいが）。

また英作文をするときには、現在で表現すべきか現在完了形で表現すべきか迷ってしまう。そこでその区別をするための知識も覚えなければならなくなる。3年生で扱う現在完了形の幅（基本文や問題集の問題の複雑さ）は大きくはないが、かといって、現在完了形の基本を教えることをどんなに簡単にしようとしてもしきれない。

中学校英語教師が現在完了形を教えるときによく用いるのは時間の流れの図である。時間の流れを表す矢印を書いて、過去・現在・未来の点を取り、ある出来事が現在続いているのか、完了しているのかが書かれている。しかしこの図は全ての生徒にとって分かりやすいものではない。



そこで今後、自分が現在完了形を教えるときの基本的な考え方にしたいのが、『英語にとって文法とは何か』の第4章 第2節 (p.133～) で書かれている「完了形」の考え方である。本来なら長時間に及ぶ現在完了形の説明を、簡単な公式にあてはめて考えさせるだけ、という画期的なものである。

またそれは完了形そのものの捉えを分かりやすく簡単にしただけではなく、現在完了形の本来の意味(原義)を全く失うことなく4用法や副詞句(節)についても生徒に抵抗感を与えない。ここにその部分を書き出してみる。

ではどうすればこの弱点を克服できるだろうか。そのひとつの方法は haveを「もつ」と書き込ませたままで、完了形の意味をわからせることである。たとえば次のように、数学における数式の変形と同じ操作を、完了形についてもやらせてみる。

(23) Young girl (have picked) the flowers everyone.

→ Young girls (have) the flowers everyone [(picked) [by them]].

→ 少女たち (もつ) 花をすべて [(摘まれた) [彼女らによって]]

→ 少女たちは [[自分たちによって] 摘まれた] 花をすべて持っている。

→ 少女たちは花をすべて [摘んでしまった状態で] 持っている。

→ 少女たちは花をすべて摘んでしまった (だから花は今もう無い)。

一見この操作はhaveを「ある」と書き込ませると同程度に不自然に見えるかも知れない。しかしこの方法は先に述べた①②の弱点を克服できるだけでなく、実は完了形ができあがってきた過程を追体験していることになっているのである。そのことはCurme(1959:358)の次の叙述によって明らかである。(英文省略)

現在完了は他動詞の現在時制から発達した。‘I have written the letter.’ はもともと ‘I have the letter written.’ つまり「書かれた状態で」ということである。書かれた状態の手紙を持っているということは当然それ以前の(書くという)動作を含んでいるから、have written は徐々に動詞の力を獲得し、動詞のひとつの形として役割を果たすようになった。そして過去をさし示しながらそれを現在との関係にもち込む働きをしている。

上の叙述から明らかなように、完了形は他動詞から出発している。したがって生徒に完了形の意味を学習させるには、典型的な他動詞を使い、(23)のような変形練習を少しさせれば、その後はいちいち上記のような変形を手で書かせなくても、頭の中で瞬時にできるようになる。もっと進めば(24)のように「語順訳」を書き込んだだけで(25)の訳がでてくるようになる。

(23) Young girls (have picked) the flowers everyone.

(24) 少女たち (もつ | 摘まれて) その花すべて

(25) 少女たちはその花すべて摘んでしまった。

(中略) こうして完了形においても(23)の変形操作をしなくても、すぐ(25)の意味が頭に浮かぶようになれば、(24)の語順訳の過去分詞を(29)のように「摘んだ」と単に過去で書き込もうが、(30)のように「摘む」とだけ書こうが、(31)=(25)の訳はできるようになる。

(28) Young girls (have picked) the flowers everyone.

(29) 少女たち (もつ | 摘んだ) その花すべて

(30) 少女たち (もつ | 摘む) その花すべて

(31) 少女たちはその花をすべて摘んでしまった。

なぜなら語順訳の空欄は単語帳のかわりに使ったにすぎず、(have | -en) という形で意味をつかむようになっているからである。言い換えれば (もつ | られて) と書き込んでも、have (もつ)、-en (～られて) のひとつひとつの意味に重きをおかず、形式全体で意味を考えるようになってきているということである。つまりhave は本動詞ではなく、意識の中で徐々に助動詞的性格を帯び始めてきているわけである。

(中略) 上の引用文におけるゴシックは寺島によるものであるが、「haveが原義をうしなって助動詞的性格を発達させるにつれて」という叙述に注目したい。これは生徒たちが語順訳のhaveに「もつ」と記入しても、頭の中では have -en という形式が全体として作り出す意味に注目し、have = 「もつ」という意識をうすれさせていく経過と似ている。

ところで、上で述べてきたような「記号づけ」による「語順訳」から出発すれば、いわゆる完了形の4用法(経験・継続・結果・完了)も教える必要がなくなる。なぜなら完了進行形を除き、「完了形」という形式そのものから「経験」「継続」などを判断できないからである。それらの意味をきめるのは文脈であったり、完了形と共に用いられている ever や already や since などの副詞句(節)であったりする。

たとえば先の(32)の場合、alreadyがあるから、この完了形の用法をわざわざ「完了」だと教えずに、(33)-(35)のどの語順訳からも(36)のような訳が自然と生まれてくる。つまり意味がわかって初めて、その英文における完了形の用法がきまるのであって、用法がわかってから和訳を始めるわけではない。だとすれば完了形の教授=学習で大切なことは次のことではないか。

- ① 典型的な他動詞を使い、(23)の「公式」によって、完了形の「形式」と「内容」「意味」をつかませる。
- ② あるいは「記号づけプリント」に完了形が出てくるたびに、(23)の「公式」をヒントとして書き込んでおく。
- ③ こうして完了形の「公式」を学んだ後は(あるいは、学びつつ)、 $i + 1$ の教材を大量に与え、文脈と副詞によって「経験」「継続」などの意味をつかませる訓練をする。
- ④ したがって「完了形の4用法」の説明に長時間かけることは生徒に「英語はむずかしい」と思わせ、有害無益である。

以上のように教授すれば、現在完了形は教師にとっても生徒にとっても難しいものではなくなる。

よく「過去と現在完了形の使い分けがわからない」という生徒もいるが、上の引用に「過去をさし示しながらそれを現在との関係にもち込む働きをしている」とある。

つまり、文脈において現在と過去の出来事とを切り離し、現在から過去を眺めているような感覚がある場合に過去を使用する。また、現在の事と過去の事とが話したい内容において繋がっている感覚がある場合に現在完了形を使うことも分かる。

さらに上の引用、「つまり意味がわかって初めて、その英文における完了形の用法がきまるのであって、用法がわかってから和訳を始めるわけではない」という部分は、他の文法にもあてはまると思われる。

もともと和訳をするとき、自然な日本語になるように助詞を補っている。だから、文章の意味を正確にとることさえできれば、あとは日本語の文章力に頼るところとなるはずである。このような結論に至れるのは「記号づけ」の良さであり、またどの文法事項・英文にもあてはめて考えられる。

これが「記号づけ」の応用力の広さであると思う。上記の『英語にとって文法とは何か』の説明は、私にとって、「記号づけ」で教えることの利点をあらためて感じさせられた、説得力のある説明であった。

2-3 中学生に行うアンケート用紙

ところで先に述べた「時相転換表」は、中学生や高校生はどれくらい正しく書くことができるのだろうか。先にも述べたように、この表を完成させることは一見簡単そうに見えるが、副詞（句）まで正しく書こうと思うと難しい。逆に言えば、この表を完成させることができれば、TENSE・ASPECTに関する文法項目が正しく理解されていることになる。

この「時相転換表」を、まず初めに中学3年生（梅林中学校）に調査することにした。そこで、この表の完成度を見るために、「A表：動詞の変化を書くプリント（副詞なし）」と、「B表：副詞のみを書くもの」の2種類に分けることにした。というのも、まずは動詞の変化が正しく書けるかどうか、「形式」を正しく認識しているかどうかが大切であると考えたからである。副詞をつけられるかどうかということは、「形式」を越えた別の力、すなわち「意味」を考える力であると思われたからである。

2-3-1 A表を作成する

寺島隆吉『英語にとって文法とは何か』に載せられていた「時相転換表」には、中学校では習わない文法項目が含まれるため、単純形（現在，過去，未来），進行形（現在，過去），完了形（現在）のみの表に作りかえなければならなかった。

また、表の上方には、元の「時相転換表」に載せられていたとおり、「未来 will+原型，進行形 be動詞+ing形，完了形 have(has)+過去分詞」と、動詞の変化 play-played-played-playingというヒントを載せた。

<A表>

中学生用① 問題：He plays tennis. を、それぞれ指示にしたがって書き換えましょう。				
	未来 will+原型			
	進行形 be動詞+ing形			
	完了形 have(has)+過去分詞形			
		原形	過去	過去分詞形
		play	played	played
				ing形
				playing
		肯定（ピリオドで終わる文）	否定（notがある文）	疑問（文の最後に？がある）
単純形	現在	He plays tennis.		
	過去			
	未来			
進行形	現在			
	過去			
完了形	現在			
Class No. Name _____				

2-3-2 Aの別表を作成してみたが…

最初は、こんな簡単な課題は誰でもできるはずだと思っていたのだが、上記のAを作りながら、はたして中学生（3年）は、He plays tennis.という文から表を全てうめることができるだろうか、と不安になった。そこで、表を少しでも分かりやすくしようと思い、それぞれの項目の下の方に、それぞれの日本語訳をつけた別表も作ってみることにした。

しかしこの分かりやすくしたはずの別表は、使われることのないものとなった。というのも、それぞれの項目に日本語を書いていたとき、現在完了形の肯定・否定・疑問の3つの訳をどのように書けばよいのか、分からなくなってしまったからである。今まで英語を教えてきていながら、こんなに短くて基本となる文が訳せないのである。

肯定① He has played tennis.

否定② He hasn't played tennis.

疑問③ Has he played tennis?

①は、「彼はテニスをしました。」にすると過去と訳が同じになってしまう（時制の概念からすると違うのであるが、日本語訳をすると過去と同じに表現になってしまう）。「彼はテニスを終えたところです」にするとfinishという単語を用いてしまうかもしれない。「彼はテニスをずっとしていました。」にするとbeen playingという単語を用いてしまうかもしれない。「彼はテニスをしたことがあります。」にすると、否定ではnotを使わないでneverを書いてしまうかもしれない。

分かりやすくするためのヒントとして日本語訳を書こうとしているのに、かえって生徒を混乱させてしまうことになることに気がついたのである。文脈がなく副詞もない、たったの4語からなる現在完了形の文が、こんなにも訳しづらいとは考えてもみなかった。

英語を母語とする人達は、①～③の文章を見て、これらの文の意味がどれくらい曖昧だと思うだろうか。そして英語を母語とする人で、日本語もかなり達者な人は、①～③をどのように和訳するのだろうか、と思った。そこで結局、今回の調査では下記の「Aの別表」は使わず、元のA表を使用した。

< Aの別表 >

中学生用 問題 : He plays tennis. を、それぞれ指示にしたがって書き換えましょう。						
			原形	過去	過去分詞形	ing 形
			play	played	played	playing
	未来	will+原型				
	進行形	be動詞+ing形				
	完了形	have(has)+過去分詞形				
		肯定 (ピリオドで終わる文)	否定	疑問		
単純形	現在	He plays tennis. 彼はテニスをします。	彼はテニスをしません。	彼はテニスをしますか。		
	過去	彼はテニスをしました。	彼はテニスをしませんでした。	彼はテニスをしましたか。		
	未来	彼はテニスをするつもりです。	彼はテニスをするつもりではありません。	彼はテニスをするつもりですか。		
進行形	現在	彼はテニスをしているところです。	彼はテニスをしているところではありません。	彼はテニスをしているところですか。		
	過去	彼はテニスをしているところでした。	彼はテニスをしていませんでした。	彼はテニスをしていましたか。		
完了形	現在	彼はずっとテニスをしています。	彼はテニスをしていません。	彼はずっとテニスをしていますか。		
Class No. Name _____						

2-3-3 B表を作成する

副詞を入れるB表は、肯定の文のみで書いてもらい、また文章の全てを書いてもらうわけではなく、副詞の部分のみとした。

そこで、生徒が副詞を書き込みながら、A表（すでに教師に提出してある）の答え合わせができるようにと、Aの肯定の正答文に副詞を書き足すという穴埋め方式とし、否定・疑問には正答文のみを載せた。

また、問題文に「副詞」という用語を使用すると生徒には分かりづらいので、「ヒント」として表の上にもその表で使われるはずの副詞をランダムに並べ替えて載せておいた。ヒントは、every day, tomorrow, yesterday, then, now, already, yetを載せ、実際には答えには入らないyetも含んでいるものとした。

< B表 > 中学生用

問題：下の表のそれぞれ肯定文には空欄があります。その空欄に適切な言葉を下のヒントを参考にして補いなさい。
 ヒント every day, tomorrow, yesterday, then, now, already, yet

		肯定	否定	疑問
単純形	現在	He plays tennis_____.	He doesn't play tennis.	Does he play tennis?
	過去	He palyed tennis_____.	He didn't play tennis.	Did he play tennis?
	未来	He will play tennis_____.	He will not play tennis.	Will he play tennis?
進行形	現在	He is playing tennis_____.	He isn't playing tennis.	Is he playing tennis?
	過去	He was playing tennis_____.	He wasn't playing tennis.	Was he playing tennis?
完了形	現在	He has _____ played tennis.	He hasn't played tennis.	Has he played tennis?

Class No. Name _____

2-3-4 打ち合わせ

1月16日に梅林中学校3年生英語科担当の教諭（2人）と打ち合わせをした。1時間の英語の時間をいただけることになり、A・Bの2種類とも生徒に書かせてもらえることになった。

この2種類の表を見るなり教諭達は「これなら全部書くのに、そんなに時間かからないね。速い人は5分で終わるね」「ヒントがあるなんて、簡単すぎない？これならできるよ」と言っていた。

それを聞いて、心の中で「そうだといけれど、中学生の全員が卒業までにつけるべき英語の基礎学力なのだから全問できることが当たり前。正解率が100%に近いといけれど」と心の中で思った。

授業中の説明や指示、プリントの回収まで全て2人の教諭（3年生5クラスを2人の教諭が2クラス・3クラスで分けて受け持っている）が行なってくださることになった。

また解答は後で配布するため、生徒が調査用紙に記入しているときには、教諭は一切アドバイスしない、ということも了解してもらえた。

2-4 調査用紙回収

2-4-1 調査実施

調査が終了したという連絡を受け、早速その調査を受け取りに赴いた。またその時に担当の教諭らから、調査中の様子などについても教えていただいた。以下は、岐阜市立梅林中学校3年生5クラスで実施した概要である。

時間	英語の授業
生徒数	1組～4組33人、5組34人 合計166人
実施人数	1組27人、2組21人、3組30人、4組28人、5組29人 合計135人（欠席者、不登校、未提出があるため）
内容	A表配布時 上部にヒントが載っている、表の書き方、仲間との相談無し B表配布時 A表の解答例が書いてある、語彙を選んで入れる
実施の様子	まずA表のみ配布。A表は15分かからない程度に終わった。 A表を回収したあと、B表の配布。B表は5分かからない程度で終わった。 A表を実施中に生徒からの質問 「yesterdayとかの言葉はつけなくていいの？」 →「つけなくていいよ」 分からない様子の生徒はあっという間に終了していた。 生徒同士で少し見合っているところがあった（質問なのか教え合いなのかは分からない） 時間をかけてじっくり考えてやっている生徒もいた。 どのクラスも20分かからないくらいで終了した。 書き方に戸惑うようなことはなかった。
採点方法	A表 大文字・小文字の間違いも○ ピリオド・クエスチョンマークがなくても○ 「～」等で省略して全文を書いていないものは× B表 スペルミス× （ヒントがあるにもかかわらず、写し間違いがあったので×にした）

2-4-2 A表回答欄の番号づけ

A表の解答欄を下図のように番号をつけ、集計しやすくした。以後、次のように番号を使用する。

例：①単純形・現在・否定

		肯定	否定	疑問
単純形	現在	He plays tennis.	①	②
	過去	③	④	⑤
	未来	⑥	⑦	⑧
進行形	現在	⑨	⑩	⑪
	過去	⑫	⑬	⑭
完了形	現在	⑮	⑯	⑰

2-4-3 誤答者数 (1) (2) (3)

誤答者数を「学級」や「TENSE・ASPECTの種類」など、視点を違えて表にまとめてみた。それぞれ (1) (2) (3) とした。

誤答者数 (1)

番号			1組	2組	3組	4組	5組	合計
①	単純形	現在・否定	7人	11人	8人	6人	12人	44人
②		現在・疑問	5	7	5	5	10	32
③		過去・肯定	2	0	0	3	1	6
④		過去・否定	7	8	12	10	10	47
⑤		過去・疑問	5	6	8	8	8	35
⑥		未来・肯定	3	2	1	6	3	15
⑦		未来・否定	7	4	5	9	7	32
⑧		未来・疑問	5	5	7	8	7	32
⑨	進行形	現在・肯定	4	5	4	6	6	25
⑩		現在・否定	5	6	6	8	8	33
⑪		現在・疑問	6	6	7	8	8	35
⑫		過去・肯定	4	3	5	8	4	24
⑬		過去・否定	5	5	7	11	5	33
⑭		過去・疑問	7	7	7	10	8	39
⑮	完了形	現在・肯定	3	5	4	4	4	20
⑯		現在・否定	6	8	4	10	5	33
⑰		現在・疑問	4	8	5	8	5	30

誤答者数 (2)

		肯定	否定	疑問
単純形	現在	He plays tennis.	① 44人	② 32人
	過去	③ 6人	④ 47人	⑤ 35人
	未来	⑥ 15人	⑦ 32人	⑧ 32人
進行形	現在	⑨ 25人	⑩ 33人	⑪ 35人
	過去	⑫ 24人	⑬ 33人	⑭ 39人
完了形	現在	⑮ 20人	⑯ 33人	⑰ 30人

誤答者数 (3)

合計	単純形									進行形						完了形		
	現在			過去			未来			現在進行形			過去進行形			現在完了形		
	肯	否	疑	肯	否	疑	肯	否	疑	肯	否	疑	肯	否	疑	肯	否	疑
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
1年 13人	0	7	5	2	7	5	3	7	5	4	5	6	4	5	7	3	6	4
2年 13人	0	11	7	0	8	6	2	4	5	5	6	6	3	5	7	5	8	8
3年 15人	0	9	6	0	12	8	1	5	7	4	6	7	4	7	7	4	4	5
4年 19人	0	7	5	3	10	8	7	9	8	6	8	8	8	11	10	5	9	8
5年 15人	0	12	10	1	10	8	3	7	8	5	8	8	4	5	8	4	5	5
合計 75人	0	46	33	6	47	35	16	32	33	24	33	35	23	33	39	21	32	30

※表中の■は30以上, ■は39以上につけた。

2-4-4 誤答例と誤答数

以下、項目ごとに誤答例と誤答数を示し、若干の考察を試みる。

1) 単純形

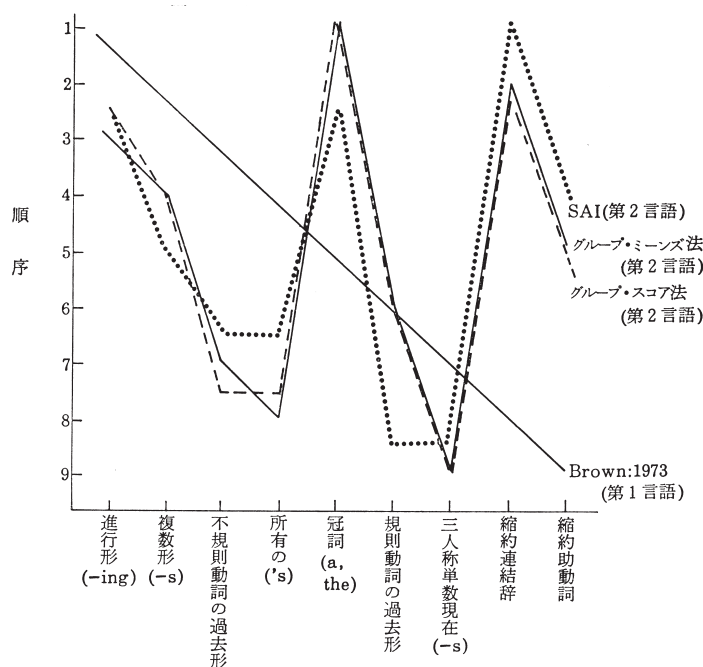
① 単純形・現在・否定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計	
単純形	現在	①否定							
		He is not plays tennis.	1	1	1			3	
		He not play tennis.	1	1		1		3	
		He don't plays tennis.		1			1	2	
		He don't play tennis.		2		1	3	6	
		He not plays tennis.		2	4	2	6	14	
		He doesn't plays tennis.		1	2		1	4	
		He doesn't play tennis. スペルミス						1	1
		He doesn't play tennis. スペルミス	1						1
		無回答	4	3	1	2		10	
合計	7	11	8	6	12	44			

※表中の は、誤答の中でも数字が大きいものにつけた。

この「単純形・現在・否定」は、1年生でも早い時期に学習する内容だが、誤答を見ると does がなかったり don't であったり、3単元の s をつけたままになっているなどの、間違いにバリエーションがある。一番多い間違いは He not plays tennis. であり、英語母語話者が英語を身につけていく段階と類似していることが伺える。

下図はデュレイ、バード&クラッシュン（1984）による「第1言語と第2言語の習得順序の比較」を示したものだが、ここでも「3人称単数現在（～s）」の習得順序が極めて遅いことが示されているが、英語の母語話者ですら、「3単現の～s」を習得しがたいのだから、当然と言えば当然である。



また否定の習得順序も、ラーゼン=フリーマン&ロング（1995：97）で見るとおり、母語話者ですら、最初は文頭や動詞の前に否定辞 no, not を置くことから習得順序がスタートするのだから、この間違いも当然のものと言えよう。

② 単純形・現在・疑問

項目		番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形	現在	②疑問	Is he plays tennis?		1				1
			Does he plays tennis?		1	2	1	5	9
			Does he playes tennis? スペルミス		1				1
			Do you plays tennis?				1		1
			Has he play tennis?					1	1
			He plays tennis?					1	1
			Do you he play tennis?					1	1
			Does he played tennis?					1	1
			無回答	5	4	3	3	1	16
			合計	5	7	5	5	10	32

誤答をみると圧倒的に3単元のsがついたままの間違が多い。下記を御覧いただければお分かりのとおり、①「単純形・現在・否定」では、doesを使っているけれども間違いだった人数は6人だったのに対し、②「単純形・現在・疑問」では11人である。

① 単純形・現在・否定

- He doesn't plays tennis. 4人
- He doen't play tennis. スペルミス 1人
- He does't play tennis. スペルミス 1人

② 単純形・現在・疑問

- Does he plays tennis? 9人
- Does he playes tennis? スペルミス 1人
- Does he played tennis? 1人

これを見ると、疑問文をつくる時、doesを使わなければならないという認識は、否定文よりも疑問文の方があのではないか。また疑問文をつくる時文頭に持ってくる助動詞として、isを使っている生徒がいるのも興味深い。文頭に何か助動詞を持ってこなければならないという意識が芽生え始めているからである。

③ 単純形・過去・肯定

項目		番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形	過去	③肯定	He was played tennis.	1			2		3
			Did play tennis?					1	1
			無回答	1			1		2
			合計	2	0	0	3	1	6

この「単純形・過去・肯定」が一番間違いが少なく、無回答も少ない。これは動詞playに規則変化の語尾~edをつけるだけでよいのだから、当然であろう。

しかし、この例文の動詞が規則変化をする動詞ではなく、不規則変化をする動詞であつたらどうなっていたのか、という疑問が湧いてくる。というのも、『英語にとって文法とは何か』(p.126)にある、Krashen and Terrell (1983:29) の習得順序の表では、不規則動詞の方が規則動詞よりも習得順序が早いことが分かるからである。

ただし母語話者の場合と、外国語として英語を学ぶ場合の習得順序は必ずしも同じではない。母語話者の場合、音声から言語を習得していくので、日常的に頻繁に使う動詞は不規則変化動詞が多いから、自然と不規則変化動詞が先に習得される。しかし、外国語として英語を学習する場合、むしろ規則動詞の方が習得しやすい。単に動詞語尾に~edをつけるだけで済むからである。上記の数値はまさにこのことを示しているように思われる。

④ 単純形・過去・否定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形	過去	④否定						
		He is not played tennis.	1					1
		He not played tennis.	1	3	3	3	4	14
		He wasn't played tennis.	1					1
		He was not play tennis.		1		1	1	3
		He didn't played tennis.		1	3		3	7
		He doesn't play tennis.			2			2
		He didn't plays tennis.			1			1
		He don't play tennis.				1		1
		He doesn't played tennis.				1	1	2
		Heのみ	1					1
		He din't play tennis. スペルミス				1		1
		He donsn't play tennis. スペルミス		1				1
Did not play tennis.						1	1	
無回答		3	2	3	3	0	11	
合計		7	8	12	10	10	47	

この「単純形・過去・否定」の誤答人数が一番多く、且つ誤答のバリエーションも多い。誤答が一番多いのはHe not played tennis. で、①（単純形、現在、否定文）のHe not plays tennis. の間違い方と似ている。先にも述べたとおり、否定の習得順序は「否定辞NOTを動詞の前に置く」がまず最初にくるが、その順序通りになっていることも興味深い。

しかし、「研究の動機」で述べたように、『英語にとって文法とは何か』で述べられていた「半丸記号」を使えば、否定文は[BE動詞を除き]必ず左半丸（助動詞）と右半丸（本動詞）の間に否定辞NOTがくるのだから、そのような指導をしておけば、このような間違いは激減するはずである。このデータを見て、改めて「記号づけ」の大切さを認識させられた。

また①「単純形・現在・否定」では三単現のsがついたままの間違いも多かったが、それと同じようにed がついたままの間違いが多い。③「単純形・過去・肯定」の間違いが一番少ないにもかかわらず、それを単に否定に変えるだけの作業なのだが、その間違いが全体が一番多いことが驚きである。しかし、すでに述べた英語母語話者が英語を身につけていく発達段階と類似していることを思い起こせば、驚きは消える。

⑤ 単純形・過去・疑問

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形	過去	⑤疑問						
		Was he play tennis?		1		1		2
		Does he played tennis?		1		2	3	6
		Did he played tennis?		1	2		2	5
		Does he play tennis?			1	1		2
		Did he plays tennis?			1			1
		He played tennis?					1	1
		Does you he played tennis?					1	1
		無回答		5	3	4	4	1
合計		5	6	8	8	8	35	

ここでは、Does he played tennis? の間違いと、Did he played tennis? の間違いがほぼ同数である。誤答にはDoes とDid が混在していて、Doesの間違いがDidよりも多い。

- Does ~?の間違い 合計 9人
- Did ~?の間違い 合計 6人
- edが付いたままの間違い 合計13人

ここでも興味深いのは、前に出す助動詞としてBE動詞を選び、それをWASという過去にしている生徒がいるということである。何か助動詞を前に出せばよいという認識だけは確立していると言える。これは、Does he played tennis? とした生徒にも言えることである。

また、He played tennis? とした生徒がいることにも注目したい。というのは、英語史をたどってみても、疑問文の習得順序でまず最初に来るのが「肯定文にしなから文尾のイントネーションをあげる」だからである。やはりここでも「個体発生は系統発生を繰り返す」という法則が実証されているとも言えよう。

⑥ 単純形・未来・肯定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形 未来	⑥肯定	Will play tennis.					1	1
		He going to play tennis.	1					1
		He will plays tennis.			1	4	2	7
		He will playing tennis.				1		1
		無回答	2	2		1		5
		合計	3	2	1	6	3	15

この「単純形・未来・肯定」が、「単純形・過去・肯定」に次いで、間違いが2番目に少ない項目である。しかし助動詞WILLを使っているにもかかわらず、「三単現」の～sをつけたまま、He will plays tennis.とする間違いが多い。

また、生徒が表を上から順に書いていっているとすると、⑤「単純形・過去」の次だから、He will played tennis. とする間違いがあってもよいはずである。しかし、そのような間違いをした生徒は一人もいない。やはり動詞語尾～edは「過去」を示すという認識が定着しているのであろう。

さらに言えば、この「単純形・未来・肯定」として、He going to play tennis.と書いている生徒がいることにも注目したい。授業で、(is) going to を未来を表す熟語として教えていることが、このような結果を生み出しているのだろう。

と同時に、He will playing tennis.と書いている生徒がいることにも注目したい。これは中学校では扱わない「未来進行形」の萌芽を示すものであるが、このような形式をなぜ思いついたのか、これを書いた生徒に尋ねてみたい気がする。

⑦ 単純形・未来・否定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形 未来	⑦否定	He will not playing tennis.		1				1
		He wan't play tennis. スペルミス	1					1
		He will not plays tennis.			1	1	1	3
		He willn't play tennis.				1	2	3
		He willn't plays tennis.				1		1
		He will tot play tennis. スペルミス	1					1
		He wont play tennis. スペルミス				1		1
		He won't playing tennis.				1		1
		He will not ～. のみ			1			1
		Heのみ	1			1		2
		Will not play tennis.					1	1
		He not will plays tennis.					1	1
		He wsn't play tennis.					1	1
		無回答	4	3	3	3	1	14
合計	7	4	5	9	7	32		

誤答のなかに、willn't と書いた生徒が4人いる。will notは他の短縮形と違ってwon't となるところが間違えやすいようだ。

しかし考えてみれば、助動詞DO, DOESの場合はdon't, doesn'tになるのだから、助動詞WILLの場合もwilln'tにしない方がおかしいとも言える。つまり「正しい間違い」なのである。

またwon'tの部分でのスペルミスも多いが同じ発音のwantを書いた生徒が1人いた(wont 1人

willn't, willn't 4人, wsn't 1人, wan't 1人)。これもwilln't と書いた生徒と比べれば、発音上は「正しい間違い」だったのである。

⑧ 単純形・未来・疑問

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形 未来	⑧疑問	Will he plays tennis?			1	2	1	4
		Is he going to playing tennis?			1	1		2
		Will he ~? のみ			1			1
		Will he playing tennis?				1		1
		Does he will play tennis?					2	2
		He will play tennis?					1	1
		Will you plays tennis.					1	1
		Will you play tennis?					1	1
		無回答		5	5	4	4	1
合計		5	5	7	8	7	32	

授業でWill you ~? というフレーズが多く出てくるためか、誤答で Will you ~? と書いた生徒が2人いる。つまりwill youをひとまとまりの熟語だと考えているのではないと思われる。

先の「単純形・未来・肯定」の項でも述べたことだが、未来⑥～⑧で、～edをつけた生徒がいない。このことから、～edは過去のものであるという認識が定着していると考えられる。

また「単純形・未来・肯定」で出てきたHe going to play tennis.を使って、Is he going to playing tennis?としている生徒がいることも興味深い。肯定文ではBE動詞を欠いた非文だったにもかかわらず、ここではBE動詞が姿を現し、しかも正しく文頭に置かれているからである。

しかし、いずれにしても、ISであれ、WILLであれ、DOESであれ、何か左半丸（助動詞）を文頭に出せば疑問文になるという点だけは定着しつつあるようだ。だとすれば左半丸を使う場合、右半丸が「原形」になるという点こそ、授業で徹底的に指導しなければならないことになる。

2) 進行形

⑨ 進行形・現在・肯定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形 現在	⑨肯定	He playing tennis.	1	3	1	2	4	11
		He is going to play tennis.				2	1	3
		Is play tennis.					1	1
		無回答	3	2	3	2	0	10
		合計	4	5	4	6	6	25

ヒントで「進行形＝be 動詞＋～ing形」と明記してあるにもかかわらず、be動詞がない間違いが圧倒的に多い。公式に当てはめて考える力がないか、「進行形＝～ing」という意識が強すぎるのかも知れない。

また、He is going to play tennis.の間違いが3人いる。一方で、is going toという形が「未来」として刷り込まれ、もう一方で「進行形＝～ing」という意識があり、生徒の理解に混乱が生じている可能性がある。だとすれば、is going toという進行形がなぜ「未来」を示す代用として使われるのかを、進行形の本義に戻って説明してやる必要があるだろう。

もう一つ考えられる理由としては、生徒にせっかく「進行形＝be 動詞＋～ing形」という公式をヒントとして与えてやっても、この公式にplayという動詞を当てはめて「複合形」をつくる能力が育てられていないことである。

これは数学でいう「順列」「組合せ」を考える能力であるが、このような力なしには英語力は育たないという証左でもある。つまり「英語力」は英語だけでは決して育たず、論理的にものを考える力が必要なのである。「英語力」＝「暗記力」ではない。

⑩ 進行形・現在・否定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形	現在	⑩否定						
		He not playing tennis.	1	2		1	2	6
		He don't playing tennis.			1		1	2
		He isn't going to play tennis.				2	1	3
		He's not ~. のみ			1			1
		He isn't play tennis.				1		1
		He doesn't playing tennis.				1	2	3
		Is not playing tennis?					1	1
無回答		4	4	4	3	1	16	
合計		5	6	6	8	8	33	

ここでは、He not playing tennis. という誤答が最も多く、①「単純形, 現在, 否定文」でのHe not plays tennis.や、④「単純形, 過去, 否定文」でのHe not played tennis.という間違いと、間違い方が似ている。

しかし、そもそも⑨「進行形・現在・肯定」を、He playing tennis.と書く誤りが最も多いのであるから、He not playing tennis. という誤答が最も多いのは、当然であろう。つまり先にも述べたとおり、「進行形=be 動詞+~ing形」という公式を当てはめて、playという動詞の「複合形」をつくる力がないのである。

もし、この力さえあれば、is playingという「複合形」は簡単につくることができるし、これをつくることができれば、そして左半丸(is)と右半丸(playing)で「複合形」を囲むことができさえすれば、その「否定」をつくることは極めて簡単である。

なぜなら、左半丸(is)と右半丸(playing)の間に否定辞NOTを入れさえすれば、「否定」は簡単につくることができるからである。そして、この左半丸(is)を文頭に出しさえすれば、次の⑪に見るとおり、疑問文も簡単につくることができる。

⑪ 進行形・現在・疑問

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形	現在	⑪疑問						
		Does he playing tennis?	1	2	1	1	3	8
		Was he playing tennis?			1			1
		Is he going to play tennis?				2	1	3
		Does he is playing tennis?					1	1
		He playing tennis?					1	1
		Was he ~? のみ			1			1
		Do you playing tennis?					1	1
無回答		5	4	4	5	1	19	
合計		6	6	7	8	8	35	

ここでは、Does he playing tennis? (8人)、Does he is playing tennis? (1人)と、doesを使ってしまった誤答が圧倒的に多い。既に何度も言ってきたように、これは「進行形」=「現在分詞」と考えているか、「進行形=be 動詞+~ing形」という公式を当てはめて、playという動詞の「複合形」をつくる力がないことを示している。

しかし不思議なことに、⑩「進行形, 現在, 否定」では、doesを使った誤答はHe doesn't playing tennis. (1人)しかいない。ここでは、He not playing tennis.という誤答が最も多かったのだが、疑問文にするためには何か助動詞を文頭に持ってこざるをえず、その代表例としてDOESが選ばれたのであろう。

またIs he going to play tennis? (3人)という誤答が2番目に多いことから、be going toのgoingが進行形をつくる要素だと捉えている生徒がいると考えられる。つまり、playという動詞を使って「複合形」をつくるのではなく、~ingという形さえあれば「進行形」だと思っているフシがある。これは⑩「進行形・現在・否定」を、He isn't going to play tennis.とする誤答が2番目に多かった事実とも符合する。

⑫ 進行形・過去・肯定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形 過去	⑫肯定	He was going to play tennis.	1		1	1	1	4
		He is played tennis.		1		1	1	3
		He's was played tennis.			1			1
		He has played tennis.				1		1
		He was played tennis.				2		2
		He played tennis.				1	1	2
		was play tennis.					1	1
		無回答	3	2	3	2	0	10
		合計	4	3	5	8	4	24

誤答はHe was going to play tennis. が一番多く、be going toが進行形と曖昧になっていることがわかる。また、He was played tennis.などという誤答が見られることを考えると、何度も言うように、「進行形=be 動詞+～ing形」という公式が与えられていても、それを使いこなす力がない。つまり進行形というものの「意味」を理解する以前に、公式を見ながらでさえ進行形の「形式」そのものをつくれないのである。

また、「過去」ということばに引きづられて、単に規則動詞の過去をつくる接尾辞～edをつけている間違いが合わせて9人いる。「過去進行形」は、左半丸 (be 動詞) を過去に、右半丸 (本動詞) にingをつけるということが分かっていないと考えられる。

～edをつけた間違いの人数は以下のとおりである。

⑫ (進行形, 過去, 肯定) 9人/全24人

⑬ (進行形, 過去, 否定) 6人/全33人

⑭ (進行形, 過去, 疑問) 5人/全39人

この場合も、『英語にとって文法とは何か』で詳しく説明されているように、「複合形」の左半丸が「時制」「人称」を表す部分であり、右半丸が「意味」を表す部分であるということを、事前に理解させておけば防ぐことができた誤答である。

それにしても、「進行形・過去・肯定」で、He has played tennis.という「完了形」、He is played tennis.やHe was played tennis.などという「受身形」まがいのものが出てくることは、「進行形=be 動詞+～ing形」という公式が与えられていても、いかにそれが目に入っていないかをよく示していると言えよう。

⑬ 進行形・過去・否定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形 過去	⑬否定	He wasn't going to play tennis.	1		1	1	1	4
		He was playing tennis.			1			1
		He wasn't ～. のみ			1			1
		He was not のみ		1				1
		He is not played tennis.				1	1	2
		He hasn't played tennis.				1		1
		He wasn't played tennis.				2		2
		He wasn't play tennis.				2		2
		He doesn't play tennis.				1		1
		was not playing tennis?					1	1
		He not played tennis.					1	1
		無回答	4	4	4	3	1	16
合計	5	5	7	11	5	33		

ここでも、He wasn't going to play tennis.という誤答が最も多いが、He was going to play tennis.が「進行形・過去」だと思っている生徒にとっては、その否定をHe wasn't going to play tennis.とするのは、当然すぎる「正しい間違い」である。

同じように、He is played tennis.やHe was played tennis.などを「進行形・過去」だと思っている生徒にとっては、その否定を、He is not played tennis.やHe wasn't played tennis.とするのは、当然すぎる「正しい間違い」である。

何度も言うように、これは進行形というものの「意味」以前に、まず進行形というものの「形式」を、徹底的に訓練して習得させなければならないことを示している。あるいは「順列」「組合せ」の概念から出発しなければならないのかも知れない。

それにしても、「否定文」をつくれと指示されているにもかかわらず、He was playing tennis.と書いた生徒は、そもそも「否定」というものの意味が分かっていないのだろうか。

⑭ 進行形・過去・疑問

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形 過去	⑭疑問	Was he going to play tennis?	1		1	1	1	4
		Did he playing tennis?	1	1	1		2	5
		Is he played tennis?				1		1
		Wasn't he ~? のみ			1			1
		Has he played tennis?				1		1
		Was he played tennis?				1		1
		Does he played tennis?				1		1
		Did he was playing tennis?					1	1
		He played tennis?					1	1
		Is he playing tennis?					1	1
		Does you playing tennis?					1	1
		無回答			5	6	4	5
合計			7	7	7	10	8	39

一番注目すべき点は、無回答が一番多いことである。この無回答に関して考えられるのは、一つには文法が定着していないこと、二つ目に調査用紙が下へ行くほど解答が難しいと生徒に思わせ、自信をなくさせているのではないかということ、三つ目に集中力が切れて、じっくり取り組めない（クラスの雰囲気も合わせて）のではなかったか、ということである。

一つ目に関して言えば、「進行形・過去・肯定」さえ正しくできていれば、何度も言うように、左半丸を文頭に出しさえすれば、自動的に疑問文になるわけだから、原理的には何ら難しい作業ではないはずである。問題は、既に述べたように、「進行形=be 動詞+~ing形」という公式を使って、いかにplayを使った「複合形」をつくらせるかに尽きる。

これは上記の2番目についても全く同じである。「調査用紙が下へ行くほど解答が難しいと生徒に思わせ、自信をなくさせている」のではなく、実は最初の「進行形・現在・肯定」さえできていれば、あとは左半丸と右半丸の割れ目に否定辞を入れたり、左半丸を文頭に出したりするなど、全く機械的な作業に過ぎない。

最後の「集中力が切れて、じっくり取り組めない」という点について言えば、寺島隆吉『英語にとって学力とは何か』でも述べられているように、実は「見える学力」の土台に「見えない学力」(集中力、持続力、計画力)がある。そのような力を育てる展望を抜きに、いくら「見える学力」(英語力)をつけようと思っても、徒労に終わる可能性がある。私は、この調査を通じて改めてそのことを思い知らされた。

3) 完了形

⑮ 完了形・現在・肯定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
完了形	現在	⑮否定						
		He have played tennis.		1		1	2	4
		He finished playing tennis.		1				1
		He was played tennis.			1			1
		He has playing tennis.				1		1
		He has のみ				1		1
		Have played tennis.					1	1
		無回答	3	3	3	1	1	11
合計	3	5	4	4	4	20		

ここでは、have をhasにできなかった間違いが一番多い。しかし、「完了形=have(has)+～ed」という公式を正しく使うことができているのであるから、間違いとして小さいものと言える。

ヒントにはhave(has)+過去分詞形とあるのに、hasが書けなかったとも言えるが、言語習得論から言っても「三単現」の習得は最も遅れる項目であるから気に病む必要はない。それよりも心配なのは、He was played tennis. やHe has playing tennis.という誤答を書いた生徒である。彼らはいまだに公式を使う力、公式を見てそれをplayという動詞に当てはめる力がないからである。

上では、He finished playing tennis.と書いた生徒もいたようだが、この生徒は「完了」と意味を正しく捉えて、それを英語で表現しようとしている。かなり学力の高い生徒とも言える。育て方次第によっては飛躍的に伸びる可能性を秘めた生徒である。

⑯ 完了形・現在・否定

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
完了形	現在	⑯否定						
		He doesn't played tennis.	1					1
		He hasn't play tennis.	1			3		4
		He haven't played tennis.		1		1	2	4
		He not finished playing tennis.		1				1
		He hasn't playing tennis.				2		2
		He hasn't playd tennis. スペルミス		1				1
		Have not played tennis.					1	1
		He not has played tennis.					1	1
		He doesn't have played tennis.				1		1
		無回答	4	5	4	3	1	17
合計	6	8	4	10	5	33		

ここでは、He hasn't play tennis.と、He haven't played tennis.の間違いが多い。haveがhasになること、play を過去分詞形にすることのどちらかに注意を引かれると、どちらかを忘れてしまうのだろうか。この疑問は⑰にも共通する。

しかし、⑮「完了形・現在・肯定」の誤答数が少ないにもかかわらず何故ここで誤答数が増えるのか?!なぜなら、既に「進行形」のところでも述べたことだが、「肯定」のところでも正しい形式で完了形をつくることができているならば、あとは単に左半丸(have, hasと右半丸(played)の割れ目に否定辞NOTを入れることができれば、簡単に否定文になるからである。

それにも関わらず、He hasn't playing tennis.などという「完了進行形」まがいのものが現れるのは、やはり公式を正しく見る「眼の力」が鍛えられていないか、あるいは、後半にいくと集中力が尽きてしまうという「見えない学力」の欠如に因るものかも知れない。無回答の数が11→17→20というように、「肯定」→「否定」→「疑問」と移るにつれて誤答数が増えているからである。

⑰ 完了形・現在・疑問

項目	番	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
完了形 現在	⑰疑問	Have he played tennis?		1			1	2
		Has he play tennis?				2		2
		Has he playing tennis?				2	1	3
		Has he playd tennis? スペルミス		1				1
		Have he played tennis?					1	1
		He have played tennis?					1	1
		無回答	4	6	5	4	1	20
合計	4	8	5	8	5	30		

ここでは、間違いのバリエーションが少なく、無回答が多い。⑭と同じく、文法の未定着、最後の問題なので難しいのではないかというあきらめ感、すでに終わっている生徒もいてじっくりと取り組めないクラスの雰囲気、などの理由があげられると考える。

しかし何度も述べてきたように、「完了形・現在・肯定」を正しくつくりことができさえすれば、あとは否定文も疑問文も全く機械的な作業で済む。そのことを授業で「記号づけ」で視覚的に分かりやすく図示し、納得させれば正解は激増するはずである。

既にもってきたように、実は誤答数が最も多かったのは「複合形」ではなく「単純形」、すなわち「単純形・現在・否定」や「単純形・過去・否定」だったからである。

そこで以下、項を改めて、この点を考察してみることにする。

2-5 A表の集計を終えて

2-5-1 間違いが多い順

順位	項目	人数	
1	④単純形 過去 否定	47人	
2	①単純形 現在 否定	44	
3	⑭進行形 過去 疑問	39	
4	⑤単純形 過去 疑問	35	
	⑪進行形 現在 疑問	35	
6	⑩進行形 現在 否定	33	
	⑬進行形 過去 否定	33	
	⑯完了形 現在 否定	33	
9	②単純形 現在 疑問	32	
	⑦単純形 未来 否定	32	
	⑧単純形 未来 疑問	32	
	12	⑰完了形 現在 疑問	30
	13	⑨進行形 現在 肯定	25
	14	⑫進行形 過去 肯定	24
	15	⑮完了形 現在 肯定	20
16	⑥単純形 未来 肯定	15	
17	③単純形 過去 肯定	6	

間違いが多い順の1位と2位は、次の項目であった。

1位 ④単純形・過去・否定

2位 ①単純形・現在・否定

次の項目の間違いが少ないことがわかる。

16位 ⑥単純形・未来・肯定

17位 ③単純形・過去・肯定

これをもう一度、別のかたちで言い換えるならば、間違いの多い順の12位までが、全て否定または疑問であり、13位からは以下全てが肯定である。また、間違いの総数としては疑問よりも否定の方が多いたことがわかる。

否定 (①④⑦⑩⑬⑯) 合計 222人

疑問 (②⑤⑧⑪⑭⑰) 合計 203人

肯定 (③⑥⑨⑫⑮) 合計 90人 (項目数がひとつ少ない)

2-5-2 個体発生は系統発生を繰り返す

何故このような順序になるのだろうか。前項に述べた考察と重なるかも知れないが、以下、「単純形・過去・否定」「単純形・現在・否定」になぜ誤答数が多いかという点にしぼって、もう少し考察

を深めてみる。

単純形を「否定文」にするためには、「肯定文」では存在しなかった助動詞DOを出現させねばならない。もともと無かったものを手品のように突然、出現させなければならないことが、困難をつくりだしている。

また突然「手品のように」出現させたDOを助動詞（左半丸）として使用し、さらに否定辞NOTを本動詞（右半丸）の前に置くという作業も、考えてみれば不自然である。それよりも本動詞の前に否定辞NOTを置くだけのほうが自然だし簡単である。

さらにもう一つの困難は、助動詞DOを左半丸として使えるようになったとしても、「三単現」の場合は、助動詞DOをDOESに変えなければならないことである。英語は歴史の風雪にさらされて屈折語尾をすべて脱ぎ去ってきているのであるから、「三単現」の～s, ～esは、まさに「過去の遺物」であり、意味をとったり伝えたりする際にも不必要な無駄な作業だとも考えられる。

つまり、名称が「単純形」であるにもかかわらず、手順が複雑なために誤答が多くなると考えられる。言語習得順序の研究も同じことを示唆している。しかし、なぜ「単純形・過去・否定」の方が「単純形・現在・否定」よりも誤答数が多いのだろうか。

それは否定文をつくるための左半丸としてBE動詞を使う誤答が多かった点が上げられる。また「過去」という指定があるため、右半丸をplayedとしたままの誤答例も多い。しかし圧倒的に多かったのは、He not played tennis.という誤答だった。しかし英語史をたどってみても、最初は否定辞を動詞の前におくだけで否定を表していたのだから、これも「個体発生は系統発生を繰り返す」の典型例かも知れない。

2-5-3 無回答が少なかった項目と無回答が多かった項目

1) 無回答が少なかった項目

問題番号	項目	人数	
③	単純形 過去 肯定	2人	(無回答を含めた間違いの合計 6人)
⑥	単純形 未来 肯定	5人	(無回答を含めた間違いの合計15人)

それぞれ③17位、⑥16位で、最も間違いが少ないものと比例している。この2つは生徒に「簡単である」「できる」という認識もかなりあると考えられる。

まず「単純形・未来・肯定」の誤答数が少ないという点であるが、「未来・肯定」にするためには、本動詞playに助動詞willを前置させるだけでよいのだから、これほど易しい作業はない。問題は「三単現」の～sを削除し、原形にする作業だけである。

これは「単純形・過去・肯定」についても同じである。過去を示す接尾辞～edを動詞playの末尾につけるだけでよいのだから、「単純形・未来・肯定」をつくる作業よりも易しい。なぜなら、「三単現」の～sを削除し、原形にする作業など不要だからである。

2) 無回答が多かった項目

問題番号	項目	人数	無回答を含めた誤答数が多かったもの		
⑰	完了形 現在 疑問	20人	④	単純形 過去 否定	47人
⑭	進行形 過去 疑問	21人	①	単純形 現在 否定	44人
⑧	単純形 未来 疑問	19人	⑭	進行形 過去 疑問	39人
⑪	進行形 現在 疑問	19人	⑤	単純形 過去 疑問	35人

いずれも誤答数が多い順位に入っているものであるが、誤答数（無回答も含めた）が1位と2位のものではない。ということは、逆にいえば、「できないと思って投げ出す」ことのなかった項目（単純形・過去・否定、単純形・現在・否定）が、実はできていないということになる。

自分で「分からない」「難しい」と思っているものならば無回答が多くても無理もないが、とりあ

えず答えを書くことができたのに、間違えてしまっているというのも問題ではないだろうか。

他方、無回答が多かったのはいずれも疑問であった。このことから、次のような推測ができる。肯定から疑問への書き換えは授業中よく扱う。肯定が書けていれば疑問がある程度推測して書けるはずである。しかし今回のA表の記入順序が否定の後に疑問を書くという順番となっていたため、生徒には難しく感じられたのかもしれない。

しかし、いずれにしても無回答が多かった「完了形」「進行形」は最初から「複合形」を成しているのだから、動詞部分に「左半丸」「右半丸」という図式化をほどこすことができれば、「否定」を先に学習しようが「疑問」を先に学習しようが、簡単に否定文・疑問文をつくることができるようになるはずである。要は、やはりどのように教えるのかに尽きるのかも知れない。

(それとも人間の認識の仕方として、「否定」と「疑問」に順序の差があるのだろうか。これは考えても見なかった新しい疑問である。「疑問をもつ」ということは「否定する」ということよりも易しいのだろうか。)

2-6 B表の集計を終えて

冒頭で本研究・調査は、TENSE・ASPECTの「形式」操作能力を調べるA表と、TENSE・ASPECTの「意味」「内容」把握能力を調べるB表の二つからなることを述べた。以下は、その調査用紙のB表である。

< B表 >

中学生用 問題：下の表のそれぞれ肯定文には空欄があります。その空欄に適切な言葉を下のヒントを参考にして補いなさい。				
ヒント every day, tomorrow, yesterday, then, now, already, yet				
		肯定 (ピリオドで終わる文)	否定 (notがある文)	疑問 (文の最後に?がある)
単純形	現在	He plays tennis_____.	He doesn't play tennis.	Does he play tennis?
	過去	He palyed tennis_____.	He didn't play tennis.	Did he play tennis?
	未来	He will play tennis_____.	He will not play tennis.	Will he play tennis?
進行形	現在	He is playing tennis_____.	He isn't playing tennis.	Is he playing tennis?
	過去	He was playing tennis_____.	He wasn't playing tennis.	Was he playing tennis?
完了形	現在	He has _____ played tennis.	He hasn't played tennis.	Has he played tennis?
Class No. Name _____				

まとめやすいように、下のように回答欄に記号をつけた。

		肯定	否定	疑問
単純形	現在	He plays tennis_____ア_____.		
	過去	He palyed tennis_____イ_____.		
	未来	He will play tennis_____ウ_____.		
進行形	現在	He is playing tennis_____エ_____.		
	過去	He was playing tennis_____オ_____.		
完了形	現在	He has _____カ_____ played tennis.		

2-6-1 誤答者数の調査結果

以下にB表の調査結果をまとめた。下は誤答者数を二つの違った角度で表にまとめたものである。それぞれ①, ②とした。

誤答者数①

合 計		単純形			進行形		完了形
		現在	過去	未来	現在	過去	現在
		ア	イ	ウ	エ	オ	カ
1組	8人	2	3	3	6	7	3
2組	5人	2	1	1	2	3	3
3組	11人	5	5	2	6	4	4
4組	12人	8	2	1	7	10	3
5組	7人	3	3	3	2	4	4
計	43人	20	14	10	23	28	17

誤答者数②

		肯定	否定	疑問
単純形	現在	He plays tennis <u>ア</u> 20人 .		
	過去	He palyed tennis <u>イ</u> 14人 (スペルミス4人含む) .		
	未来	He will play tennis <u>ウ</u> 10人 .		
進行形	現在	He is playing tennis <u>エ</u> 23人 .		
	過去	He was playing tennis <u>オ</u> 28人 (スペルミス3人含む) .		
完了形	現在	He has <u>カ</u> 17人 (スペルミス3人含む) played tennis.		

2-6-2 誤答例と誤答数

1) 単純形

(ア) 単純形・現在

項目	誤 答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形 ア現在	now	1	1	3	6		11
	yesterday			1			1
	then				1		1
	tomorrow					1	1
	tomorrow every day					1	1
	無回答	1	1	1	1	1	5
	合計	2	2	5	8	3	20

ここでは、nowの誤答が11人とダントツに多い。「現在=今」という思い込みがあるようだ。現在を教えるのは1年生の春だが、初めて本格的に英語を学び始めた1年生に「現在とは何か」を説く教師はいないだろう。

ではいつ教えるべきなのか。この調査を行ったのは1月であるから、このまま教えないときちんと理解できていまま卒業してしまうことになる。それとも「現在」から導入する指導体系そのものを見直すべきなのだろうか。

『英語にとって文法とは何か』でも、「過去」から教えた方が意味も確定しているので教えやすいと書かれている。だとすれば従来から記号研が主張しているように、自主教材THE BIG TURNIP (いわゆる「大きなカブ」の英語版) のような基礎教材を使って、過去を導入すれば、同時にSVOの語順も定着させることができる。

しかしそれにしても「現在」と指示されているのに、yesterdayやtomorrowを選んだ生徒の、頭の構造はどうなっているのだろうか。

(イ) 単純形・過去

項目	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形 イ過去	スペリングミス yesterday	1					1
	スペリングミス yesterdal			1			1
	スペリングミス yeasterday			1			1
	スペリングミス yeaterdy					1	1
	判別不能			1			1
	every day			1			1
	then				1	1	2
	yet				1		1
	無回答	2	1	1	0	1	5
合計	3	1	5	2	3	14	

ヒントに正しく yesterday と書いてあるにもかかわらず、スペリングミスが 4 人と多い。これは「公式」が与えられているのに、その公式に従って進行形や完了形をつくれぬのと似ている。「見えない学力」の一つに、新しく「視覚力」を付け加える必要を感じる。

というのは「見れども見えず」という貧弱な「視覚力」では、どのようなヒントを与えようか、どのような公式を与えようか、それが意味を成さないからである。

それとも、このスペリングミスの多さは、2 枚目の調査用紙であるために、生徒の集中力が切れ、疲れをおぼえたり、嫌気がさしてきたりしたためだろうか。つまり教室の雰囲気が落ち着いて解答できる状態ではなくなってきたためとも考えられる。

なお「毎日テニスをした」「その時、テニスをした」という意味では、every day, then も正解になりうるが、ヒントの単語は 1 回しか使えないことになっているので、消去法でいくと、これは誤答になる。こんなところにも、英語力は単に英語の知識だけに因るものではないことが分かる。

(ウ) 単純形・未来

項目	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
単純形 ウ未来	判別不能			1			1
	every day tomorrow					1	1
	every day					1	1
	無回答	3	1	1	1	1	7
	合計	3	1	2	1	3	10

これは一番間違いが少ない項目である。tomorrow という単語が「明日」という意味であることを知っていれば、そして「未来」を示す副詞句として、これを選ぶのは当然であろう。

また、yesterday のように、スペリングミスをした生徒もいない。tomorrow を書けない生徒が多くて、ヒントをよく見て書いた結果、スペリングミスがないのだろうか。

というのは、yesterday は 1 年生で既習のために、「書けるはず」という自信があって、ヒントを見ないで書いた生徒がいるとも考えられるからである。

(実は私自身が、tomorrow という単語は、tomorow のように間違えて書くことが少なくない。これは、to-mor-row のように分節して教えると、スペルだけでなく発音上も正しく定着するだろう。)

2) 進行形

(エ) 進行形・現在

項目	誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形 エ現在	every day	3	1	3	2	1	10
	then			1	2		3
	already			1			1
	day				1		1
	無回答	3	1	1	2	1	8
	合計	6	2	6	7	2	23

これは、2番目に間違いが多い項目である。every dayの誤答が10人と多い。every dayは確かに「現在」の「習慣」を表現する場合に用いるが、進行形のようなある一時的な時間を表現する場合に用いることは不適切である。

和訳すると「毎日テニスをしている」となり、日本語として違和感がないことも間違えてしまう原因なのかもしれない。日本語が干渉していて、正しい判断を鈍らせているのではないだろうか。

そのように考えると、thenを選んだ理由も分かるような気がする。和訳すると「そのときテニスをしてた」となり、日本語として不自然ではないからである。ただ気になるのは「無回答」の数かなり多いことである。

(オ) 進行形・過去

項目		誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
進行形	オ過去	yesterday	2			4		6
		every day	1			2		3
		スペリングミス than	1	1				2
		スペリングミス them		1				1
		yet			2	2	3	7
		already			1			1
		無回答	3	1	1	2	1	8
		合計	7	3	4	10	4	28

スペリングミスを除いても（無回答を含めて）間違いは25人と、最も多い。間違いはyesterdayとyetが多い。

確かに、yesterdayを選べば、日本語で「昨日～していました」となるので、間違っているとは考えない生徒が出てきても不思議はない。

yetはB表ではどれも当てはまらない。そのために、どこかで使わなければならないと思って入れてしまった生徒がいるかもしれない。

もしくはyetを選んで日本語訳をしたときに「まだ～していた。」と訳し、間違いに気が付かなかったのかもしれない。

ここで、thanのスペリングミスが2人いるのは、比較級が既習なので、thanとthenの混同が起きたのではないかと考えられる。

3) 完了形

(カ) 完了形・現在

項目		誤答	1組	2組	3組	4組	5組	合計
完了形	カ現在	yet			1	1	1	3
		now then			1			1
		スペリングミス alreday		1				1
		スペリングミス alrealy			1			1
		スペリングミス alredy					1	1
		already then					1	1
		無回答	3	2	1	2	1	9
		合計	3	3	4	3	4	17

ここでは、yetという誤答が目立つ。yetは現在完了形で用いられる副詞のひとつであるため、ここで使ったのであろう。しかしyetは、まず否定文や疑問文で使われ、語尾につけるものだ、という理解は完全ではないようだ。

というよりも、空欄の数よりひとつ多いヒントをつけ、その正解になりえないヒントとして用法の難しいyetという単語を選んだことが、無回答の数を最も多くさせた原因かも知れない。したがって、

ここで問題なのは、誤答よりも無回答の多さであろう。

また、ここではTENSE・ASPECTの意味を正しくつかんでいるかを試す問題として、副詞句をあらかじめヒントとして提出してある。だから、alreday, already, alredyなどのスペリングミスは、考えようによっては「正解」のなかに含めてよいかも知れない。

なぜなら、このスペリングミスをした生徒は、「完了形・現在」を示す意味として、「既に」という副詞を正しく選ぶことができているからである。ただ書き写す際に「視覚力」が弱かったがためにスペリングミスをしてしまったわけである。

2-6-3 スペリングミスを除いた間違いが多い順

上で「完了形・現在」の誤答を分析した際、次のように述べた。

また、ここではTENSE・ASPECTの意味を正しくつかんでいるかを試す問題として、副詞句をあらかじめヒントとして提出してある。だから、alreday, already, alredyなどのスペリングミスは、考えようによっては「正解」のなかに含めてよいかも知れない。

なぜなら、このスペリングミスをした生徒は、「完了形・現在」を示す意味として、「既に」という副詞を正しく選ぶことができているからである。ただ書き写す際に「視覚力」が弱かったがためにスペリングミスをしてしまったわけである。

だとすれば、誤答分析をする際、このスペリングミスを省いたデータはどうだったのか、ということが気になってくる。そこでスペリングミスを省いて作り直したものが次の表である。

間違いが多い順

順位	項目	人数
1	オ (進行形 過去)	28人
2	エ (進行形 現在)	23
3	ア (単純形 現在)	20
4	カ (完了形 現在)	17
5	イ (単純形 過去)	14
6	ウ (単純形 未来)	10

間違いが多い順 (スペリングミスを除く)

順位	項目	人数
1	オ (進行形 過去)	25人
2	エ (進行形 現在)	23
3	ア (単純形 現在)	20
4	カ (完了形 現在)	14
5	イ (単純形 過去)	10
	ウ (単純形 未来)	10

こうしてみると、スペリングミスを除かない表と除いた表とでは、順位に基本的な変化はないことが分かる。順位に変化があったのは、スペリングミスを除かない表では「単純形・未来」がいちばん誤答数が少なかったのに、スペリングミスを除いた表では「単純形・過去」と順位が同じになってしまっている。

しかし他方で、スペリングミスを除いた表と除かない表を比べてみても、「進行形・過去」「進行形・現在」が「単純形・現在」よりも誤答数が多いという実態には変化がない。これは従来の言語習得論研究の結果をくつがえすものである。

というのは、従来の言語習得論研究では、現在 (とりわけ「三単現」) の習得はずっと遅れるものの、進行形の習得はきわめて早いというのが通説だったからである。これは再考するに値する重要なデータであると思われる。

2-6-4 B表の全体に関わって

B表全体の結果をみてきて考え込んでしまった。もし英語教師が「日本語に訳してみても、おかしいと思えばその答えは違っているのだ」と授業中に教えているとしたら、これはかなり良くない教え方ではないだろうか。このB表の結果を見ていると、そんな気がしてならない。

誤答にあたる語を入れて全文を訳してみると、日本語ならば意味合いが全くおかしくないものがたくさんある。ある語を入れて日本語に訳したとき、その意味が通じなければ間違っていると理解できる。しかし日本語に訳してみてもおかしくないのに、「英語の世界ではそのような語は入らない」と教えるのは、生徒には納得がいかないであろう。

既に述べたように、例えば「彼は毎日テニスをしていました。」というように日本語に訳してみると、「進行形・過去」で、「毎日」という副詞が間違いだと生徒は思えないはずである。だから進行形というものが、何を表現するときに使うものなのかということ教えることはとても肝心なことなのである。進行形・過去の「形式」[was(were)+～ing]だけを教えていては、真に進行形・過去を教えたことにはならない。

第2に、これも既に述べたことだが、スペリングミスとみなすか正答とするかで悩んだ。というのも、ヒントには正しい語が載っているのであるからである。ヒントがなければ大目に見て正答にしてもよいが、ヒントがあっても間違えるということは、これまでも間違えてその語を書いていたという可能性が高く、これもある種の生徒の間違いやすさを反映しているのではないかと思われるからである。この場では網掛けをし、間違いの数に入れた。

しかし、あとで考えてみたら、それは「英語力」というよりも「視覚力」「識字力」の問題ではないかと思うようになった。つまり、「形」「文字」を識別する「眼の力」をどう鍛えるかという「見えない学力」が、ここでは問われているのではないかと考えたのである。

第3に、B表は単語を選んで書くだけであったが、無回答が多い。A表を提出してからB表を配布したために、集中力が途切れてしまったのかもしれない。また既に述べたように、ヒントに正しい単語が書いてあったにもかかわらず、スペリングミスが目立つ項目もあった。

ただし、スペリングミスを正答に入れても、順位に変動はなかっただけでなく、間違いが多い順を見ると、進行形が多いことに気づいた。進行形の2つともが、間違いの1位と2位を占めていることから、進行形は現在であっても過去であっても、副詞を入れることが苦手であると言える。つまり進行形の意味が正しく理解されていないと考えられるのである。

進行形は習得順序からすると一番先に定着しているはずであるが、進行形という「相」の認識（進行形は、ある一時的な時間を表現するものであるという認識）が、生徒にとって把握が難しいのではないかと思われる。また、授業で進行形を扱う際に、副詞句をつけた例文が少ないことも原因の一つではないかと思われる。

そこで次に、今までの言語習得論の研究成果と今回の調査結果をつきあわせてみると何が新しくみえてくるのか。それを項を改めてもう少し詳しく述べてみたい。

2-7 言語習得研究との比較

白畑（2004）では、これまでの言語習得研究によって判明してきた学習者の言語能力の発達過程を踏まえた、教科書の指導順序や教授法・学習法に関するいくつかのデータが載っている。以下に引用を載せ、自分の調査結果と照らし合わせてみようと思う。以下の表で網掛け部分は著者による。

＜母語習得の場合＞ ブラウンはそれぞれ異なった家庭環境で生活しているアメリカ人の幼児3人の発話データを長期間観察し、文法形態素の習得には下の表のような、ある一定の習得順序があることを発見した（p.21, ll.8-10）。

順位	文法項目	例
1	進行形 (- ing)	Mommy sleeping
2	複数形 (- s)	Two books
3	一般動詞 (不規則過去)	Mommy went
4	所有 ('s)	Baby's bear
5	be動詞 (連結)	Tom is a nice boy
6	冠詞 (a / the)	Tom is a nice boy
7	一般動詞 (規則過去)	Daddy walked
8	三人称単数現在 (- s)	He runs
9	be動詞 (助動詞)	He is playing the guitar

＜第二言語習得の場合＞ デュレイらは、スペイン語または中国語を母語とし、アメリカではほぼ自然な環境で英語を習得している子ども（5～8歳）から発話データを集めました。そして第二言語習得においても、母語習得と同じように、子どもたちが高い割合で形態素を正しく使用できるものと使用できないものがあることを見出し、第二言語習得においては、下の表のような習得順序があると提案しました (p.23, ll.2-9)。

順位	文法項目	順位	文法項目
1	代名詞	6	be動詞 (助動詞)
2	冠詞 (a / the)	7	一般動詞 (規則過去)
3	進行形 (- ing)	8	一般動詞 (不規則過去)
4	be動詞 (連結)	9	所有 ('s)
5	複数 (-s)	10	三人称単数現在 (-s)

Krashenらによる第二言語の文法形態素の自然習得順序 (p.24)

第1段階	進行形 (-ing)
	複数 (-s)
	be動詞 (連結)
↓	
第2段階	be動詞 (助動詞)
	冠詞 (a / the)
↓	
第3段階	一般動詞 (不規則過去)
↓	
第4段階	一般動詞 (規則過去)
	三人称単数現在 (-s)
	所有 ('s)

＜日本人英語学習者の場合＞ 白畑は、教室環境で英語を6年間学習した31人の高校生から発話データを集めました。そして、被験者が80%以上の割合で正しく形態素を使用できているか調査し、正しく使用できる被験者の人数が多い順に形態素を並べました。そして、日本人英語学習者の形態素の習得順序を下のように提案しました (p.25, ll.5-10)。

順位	文法項目	順位	文法項目
1	be動詞 (連結)	6	一般動詞 (不規則過去)
2	進行形 (- ing)		不定冠詞 (a)
3	所有 ('s)	8	三人称単数現在 (-s)
4	be動詞 (助動詞)	9	一般動詞 (規則過去)
5	複数 (-s)	10	定冠詞 (the)

＜教科書の文法項目導入の順番と習得順序＞ では、日本人英語学習者の習得順序は、教科書での導入順序を反映しているのでしょうか。ここでは下の図の教科書で扱われている形態素の順番と日本人英語学習者の形態素の習得順序を並べてみます (p.26, ll.9-13)。

教科書 (New Horizon) の順番と習得順序 (白畑) の比較

順番	教科書の順番	順番	習得順序
1	be動詞（連結）	1	be動詞（連結）
2	不定冠詞（a / an）	2	進行形（- ing）
3	定冠詞（the）	3	所有（'s）
4	複数（-s）	4	be動詞（助動詞）
5	三人称単数現在（-s）	5	複数（-s）
6	所有（'s）	6	一般動詞（不規則過去）
7	be動詞（助動詞）	8	不定冠詞（a / an）
	進行形（- ing）		三人称単数現在（-s）
9	一般動詞（規則過去）	9	一般動詞（規則過去）
10	一般動詞（不規則過去）	10	定冠詞（the）

2-7-1 A表の調査結果について

1) データ収集の違い

以下、白畑（2004）の習得順序と、自分の調査の結果とを比べてみようと思う。ここではまずA表について考察する。

しかし自分の調査内容は文法形態素の一部、すなわちTENSE・ASPECTに限定しているため、白畑の研究と一致していない。したがって比較は部分的である。また、この比較において、自分の調査結果で、間違いが少ない項目については、習得が早いとみなす。

白畑のデータは、高校生31人であるが、自分の調査は公立中学生およそ140人である。このあたりの差が、結果にどれほど響いているのか興味がわく。そこで、もう一度A表の間違いの人数を載せる。

		肯定	否定	疑問
単純形	現在	He plays tennis.	① 44人	② 32人
	過去	③ 6人	④ 47人	⑤ 35人
	未来	⑥ 15人	⑦ 32人	⑧ 32人
進行形	現在	⑨ 25人	⑩ 33人	⑪ 35人
	過去	⑫ 24人	⑬ 33人	⑭ 39人
完了形	現在	⑮ 20人	⑯ 33人	⑰ 30人

2) 習得順序の比較

上記A表の結果を間違いが少ない順番に並べかえ、さらにKrashenら（1976）や白畑（2004）の習得順序と比較する。

< Krashenらの習得順序 >

段階	項目
第1	進行形（-ing）
	複数（-s）
	be動詞（連結）
↓	
第2	be動詞（助動詞）
	冠詞（a / the）
↓	
第3	一般動詞（不規則過去）
↓	
第4	一般動詞（規則過去）
	三人称単数現在（-s）
	所有（'s）

< 白畑の習得順序 >

順	習得順序
1	be動詞（連結）
2	進行形（- ing）
3	所有（'s）
4	be動詞（助動詞）
5	複数（-s）
6	一般動詞（不規則過去）
	不定冠詞（a / an）
8	三人称単数現在（-s）
9	一般動詞（規則過去）
10	定冠詞（the）

< A表 間違いが少ない順 >

順	項目
1	③単純形 過去 肯定
2	⑥単純形 未来 肯定
3	⑮完了形 現在 肯定
4	⑫進行形 過去 肯定
5	⑨進行形 現在 肯定
6	⑰完了形 現在 疑問
7	②単純形 現在 疑問
	⑦単純形 未来 否定
	⑧単純形 未来 疑問
10	⑩進行形 現在 否定
	⑬進行形 過去 否定
	⑯完了形 現在 否定
13	⑤単純形 過去 疑問
	⑪進行形 現在 疑問
15	⑭進行形 過去 疑問
16	①単純形 現在 否定
17	④単純形 過去 否定

自分の調査はTENSE・ASPECTに関わるもののみ限定しているので、Krashenや白畑の動詞に関わらないものは除外して並べなおすと次のようになる。

＜Krashenらの習得順序＞		＜白畑の習得順序＞		＜A表 間違いが少ない順＞		
段階	項目	順	習得順序	順	項目	
第1	進行形 (-ing)	1	be動詞 (連結)	1	③単純形	過去 肯定
	be動詞 (連結)	2	進行形 (-ing)	2	⑥単純形	未来 肯定
↓		4	be動詞 (助動詞)	3	⑮完了形	現在 肯定
第2	be動詞 (助動詞)	6	一般動詞 (不規則過去)	4	⑫進行形	過去 肯定
↓		8	三人称単数現在 (-s)	5	⑨進行形	現在 肯定
第3	一般動詞(不規則過去)	9	一般動詞 (規則過去)	6	⑰完了形	現在 疑問
↓				7	②単純形	現在 疑問
第4	一般動詞 (規則過去)				⑦単純形	未来 否定
	三人称単数現在 (-s)				⑧単純形	未来 疑問
				10	⑩進行形	現在 否定
					⑬進行形	過去 否定
					⑯完了形	現在 否定
				13	⑤単純形	過去 疑問
					⑪進行形	現在 疑問
				15	⑭進行形	過去 疑問
				16	①単純形	現在 否定
				17	④単純形	過去 否定

このようにBE動詞，一般動詞に関わらないものを除くと，Krashenらと，白畑の調査結果がよく似ていることがわかる。しかし先述のとおり，自分の調査結果から見ると，進行形の習得は必ずしも早いとは言えない。

つまり従来の言語習得研究で「進行形の習得は早い」とされているが，これは単に～ingという形の認識が容易であるというだけで，このいわゆる「現在分詞」とBE動詞を組み合わせる「進行形」をつくったり，進行形の正しい用法が理解されたりしているわけではないということが，この調査結果から見えてくる。

その証拠に，BE動詞を助動詞として使えるようになるには，Krashenの表では第2段階まで待たなければならないし，白畑の表でも習得順位は4番目（動詞に関する形態素としては上から3番目）である。また本調査でも「進行形・現在・肯定」で誤答数が最も多かったのはBE動詞を欠いた下記のような文だった。

He playing tennis.

ということは，形態素として「進行形 (～ing)」の習得順序が早いといっても，それはBE動詞を助動詞として使って「be+～ing」という進行形をつくったり，それを正しく使って書いたり話したりしているわけではない，ということの意味する。つまり，従来の言語習得研究における「習得順序」の意味を，根本的に再考する必要があるわけである。

また面白いことに，「進行形・現在」と「進行形・過去」の両方が，次のように「肯定」同士，「否定」同士，「疑問」同士で，習得順序が隣同士または重なり合っていると同時に平行していることである。これが何か深い意味を持つものなのかも興味ある研究課題である。

順位	進行形
4	⑫進行形 過去 肯定
5	⑨進行形 現在 肯定
10	⑩進行形 現在 否定
10	⑬進行形 過去 否定
13	⑪進行形 現在 疑問
15	⑭進行形 過去 疑問

（「現在・疑問」が13位で、「過去・疑問」が15位となり、間に14位が割り込んでいるように見えるのは、13位に「単純形・過去・疑問」という同時順序のものがあるからに過ぎない。）

3) 一般動詞（規則過去）および三人称単数現在について

白畑の調査によると、「一般動詞（規則過去）」の習得順序は9位となっているが、自分の調査では「単純形・過去・肯定」が一番習得が早い。このことから、一見すると白畑の調査とは反対の結果のように思われるが、同じ単純形・過去でも、「単純形・過去・否定」を見ると17位（最下位）となっており、「肯定」と「否定」のギャップがとても大きいことが分かる。

つまり、自分の調査結果では、一般動詞（規則過去）でも「肯定」と「否定」とでは、明らかに習得の度合いが違っている。そのため、一概に「規則動詞」というくくりだけでは、その習得順序が早いとも遅いとも言い難いのではないだろうか。他の項目を見ても、本調査では、「肯定」より「否定」の間違いが多くなっている。

このように考えると、漠然と「形態素」の習得順序を考えるのでは明らかに問題があるように思われる。肯定文・否定文・疑問文とを区別して考える必要がありそうだ。この意味でも、「進行形」と同じように、「一般動詞（不規則過去）」「一般動詞（規則過去）」の習得順序も、根本的に再考する必要があるように思われる。

最後に、デュレイ・クラシェン・白畑のいずれの調査でも、三人称単数現在の習得が遅いことが示されているが、自分の調査でも、「単純形・現在・否定」の間違いの多くは、He not plays tennis. で、doesを使うことも、playsの～sを取ることも出来ていないものである。これは「単純形・現在・疑問」の場合でも全く同じである。

今回の調査ではHe plays tennis.を基準として展開する表であったために、He plays tennis.（彼はテニスをします。）をどのくらいの生徒が正しく書くことができるかは分からないが、三単現の～sをつけ忘れる生徒が少なくないことは予想できる。今から考えると、「彼はテニスをする」という日本語と、そのヒントに[he, tennis, play]という単語を与えておくという問題形式のほうが良かったのかも知れない。そうすれば「単純形・現在・肯定」の誤答も調べることができたと思われるからである。

2-7-2 B表の調査結果について

以上、A表の調査について述べてきたが、これは主としてTENSE・ASPECTの「形式」に関わるものであった。そこで次にTENSE・ASPECTの「意味」「内容」に関わるものとして、B表の調査結果について、改めて考察を試みることにする。

まず、B表の調査結果を「間違いが少ない順」に並べ替え、その誤答例を書き出すと次のようになる。そして、それと比較しやすくするために、その隣にA表の調査結果を並べてみた。ただしB表の調査は「肯定」のみなので、ここでも「肯定」のみを載せた。

<間違いが少ない順（スペルミスを除く）>

順位	B表の結果	人数	順位	A表の結果
1	イ 単純形 過去	10	1	③単純形 過去 肯定
	ウ 単純形 未来	10	2	⑥単純形 未来 肯定
3	カ 完了形 現在	14	3	⑮完了形 現在 肯定
4	ア 単純形 現在	20	(4)	(単純形 現在 肯定?)
5	エ 進行形 現在	23	5	⑫進行形 過去 肯定
6	オ 進行形 過去	25人	6	⑨進行形 現在 肯定

またA表では、「単純形・現在」は最初から、He plays tennis.として与えられているので、上記の順位には登場してこないが、もしこれも調査すれば(4)の位置に入ってくるのかもしれない。さらに言えば、元のA表においても「肯定」が<間違いが少ない順位>の上位5位を占めているので、「否定」「疑問」を加えても、この順位に変化はない。

さて、以上のことを踏まえてB表を考察すると、どのようなことが見えてくるのだろうか。

上の表から分かるように、進行形は定着が早いと言われているが、副詞(句)を付けるB表では、全く逆の結果になっている。「進行形・過去」「進行形・現在」の両方が、<間違いの少ない順位>で、ピリの5位、6位を独占しているのである。そして、従来の言語習得研究では習得順序が遅いとされている「単純形・現在」が、下から3位に来ている。

つまり、「進行形」の「内容」「意味」がよく分かっていないので、それにどのような副詞をつければ良いのかが分からないのである。授業での会話練習でも、場面の設定が曖昧だったように思われる。その点、「完了形」は副詞が文章の中で重要な役割を果たすので、同時に学習するため、定着も良いのではないだろうか。

要するに、従来の言語習得研究では「進行形」の習得順序が早いとされてきたが、それを根本的に再検討する必要がある、ここでも示されていると考えて良いのではないだろうか。

しかし、A表と比べてみると、「進行形」の「内容」「意味」がよく分かっていないので習得順序が遅くなるだけでなく、「進行形」の「形式」すらも、十分に習得されていないことが分かる。なぜならA表でも、「進行形・過去」「進行形・現在」の両方が、<間違いの少ない順位>で、ピリの5位、6位を独占しているからである。

だとすれば、前節でも既に考察したように、従来の言語習得研究では「進行形」の習得順序が早いとされてきたが、それは単にいわゆる「現在分詞～ing」の形式だけが早く認識されるだけであって、「BE動詞+現在分詞」という「複合形」が正しく認識されていたわけではないことを示唆している。「従来の言語習得研究を根本的に再検討する必要があるのではないか」と主張する理由がここにある。

2-7-3 調査結果の全体について

1) 疑問点① TenseやAspectの調査がこれまでに無いのはなぜか

どうしてKrashenや白畑は、習得順序(形態素別)をまとめたとき、TENSEやASPECTと他の文法項目(不定詞・定冠詞・所有格などの定着)を混合したのだろうか。こんな疑問を持ったのは、自分の調査結果とKrashenや白畑の習得順序とを見比べた時である。

Krashenや白畑の習得順序の表は、TENSEやASPECTも形態素もごちゃ混ぜであるのに対して、自分の調査はTENSEやASPECTのみである。このように比較する内容が対一に対応していないため、比較し難くなっている。

また自分の調査からは、否定文や疑問文はなかなか定着しないことが分かり、「単純形・過去・否定」が一番習得が遅いと言える。この「単純形・過去・否定」は、白畑が唱える習得順序や、Krashenが唱える習得順序では、一体何番目に入るのだろうか。

そこで寺島教授に「どうしてKrashenや白畑は形態素のみに絞って調査したのか」「誰の研究でもよいが、これまでにTENSEやASPECTのみに絞って調査したものはないのか」ということを尋ねた。すると、「形態素の調査項目がこの時相転換表と一致しないのは、これまでの調査では、英文の何が幹で枝葉なのか、ということがはっきりと区別されていなかったからではないか」との返答を得た。

『英語にとって文法とは何か』では、英文の「心臓部」は述語動詞にあるとして、生徒にTENSE, ASPECT, VOICEをまずきちんと習得させることの重要性(さらには、文法の教授=学習において、「幹」と「枝葉」を区別することの重要性)が説かれているが、従来の言語習得研究では、このような視点がなかったために調査が総花的になったのではないかと考えられる。

2) 疑問点② データの収集法に信憑性はあるのか

山岡俊比古1997『第2言語習得研究』第2章の、第2言語習得における文法的形態素の習得順位(p.37)のなかで、Dulay & Burt(1973)が英語を第2言語として習得する過程においても、英語を母語とする人の習得順位がほぼ同じだったことの調査を次のように説明している。

アメリカの3つの異なった地域で英語を第2言語として習得している子供の集団を対象として、このことを調べた。子供の年齢は5歳から8歳にわたっている。どの集団の子供も母語はスペイン語で、全員がおもに自然な環境で英語を習得している。発話データはBMSと呼ばれる方法で収集された。この方法は、子供に漫画を見せ、それについて実験者が質問し、子供がこれに答える形で子供から発話を導く。例えば、太った男の絵を見せ、実験者がWhy do you think he's so fat? と質問する。これに対して、子供は、例えば、He eats all day. ; He eats too much. ; He eats junk. ; He drinks too much beer. などと答える。これによって規則3人称形態素の習得状況を調べるデータが得られる。このデータ誘出法は、実験者と子供との間の自然な会話をねらったもので、子供から自発的な発話を引き出すことができることとされている。(pp.37-38)

やはり、このような絵の説明をさせるような方法では、大抵の場合「否定」は使われないように思われる。また、質問に答える形式のため、子供が質問文を作らないので、疑問が習得されたのか、ということについても分からない。そのため、質問内容がどのようなものであったのかは分からないが、質問内容が被験者の答えを大きく左右していると思われる。このBMSの方法では、実験者によって結果に違いが生じると思われるので、この方法での結果は、実験者や被験者の多様さと人数の多さが、必要であると思われる。次のDulay & Burt (1974) は、スペイン語と中国語を母語とする子供集団でも調査をしている。

いずれの集団もアメリカで生活しており、自然な環境で英語を習得している。BMSでデータを収集して分析した結果、両者の正確さの順位の間きわめて高い順位相関が確認された。このことは英語の形態素使用の正確さの順位が、学習者の母語の違いにもかかわらず、一貫していることを示すものである。このような研究において確認された共通的な順位は「自然な順位(natural order)」と一般的に呼ばれる。(pp.38-39)

ここでも、スペイン語と中国語を母語とする子供集団は、英語と比較すると、語順が似ている集団であると言える。そのため、母語が英語と語順が似ていない日本語などの子供集団ではどうなのか、という疑問が湧いてくる。この点について山岡俊比古『第2言語習得研究』では次のようなまとめをしている。

最初の前提通りに、正確さの順位が習得順位を反映するとすれば、以上の研究からつぎのような結論が得られる。第2言語としての英語の習得における文法的形態素の習得順位は、学習者の居住地域の違い、母語の違い、年齢の違いにもかかわらず一貫している。しかし第2言語習得における文法的形態素の自然な習得順位は、第1言語習得で確認された習得順位と完全には一致していないことに注意しなければならない。(p.38, 1.32-p.39, 1.4)

上のような結果を導いたBMSという調査方法に疑問を投げかける研究者がいた。Larsen-Freemanである。Larsen-Freeman (1975)は、5つの異なった言語をそれぞれ母語とする成人24人を被験者として、以下の異なった方法でデータを収集している。

- (i) BMS
- (ii) 聴解作業（絵を説明する3つの文を聞き、正しいものを選ぶ）
- (iii) 読解作業（物語を説明する3つの文を読み、正しいものを選ぶ）
- (iv) 筆記作業（文の穴埋めを行う）
- (v) 模倣作業（聞いた文を口頭で繰り返す）

実験の結果は次の通りであった。(iii)を除いた4つの作業のそれぞれにおいて確認された形態素の習得順位は、学習者の母語の違いにもかかわらず、それぞれ学習者間で一致度が高いが、作業間では必ずしも一致しなかった。このことは、作業の内容の違いによって現れる順位が異なることを示している。なお、いわゆる自然な習得順位を示したのは、BMSを用いた(i)の作業のみであった。(p.40, ll.1-6)

上の引用に、「作業の内容の違いによって現れる順位が異なることを示している」「いわゆる自然な習得順位を示したのはBMSを用いた(i)の作業のみであった」とある。これまでの調査の殆どがBMSで行われたからであり、作業内容が違えば結果も異なるのならば、何故それらの作業内容の違いによって順位に差ができるのかを突き詰めた調査結果も知りたかった。

また、どの作業においても習得順位が変わらないのであれば「一般的な習得順位」と言えるだろうが、作業によって結果が異なるようでは、それらのデータの信憑性も問われるのではないか。山岡の前掲書によれば、このことについて、Porter (1977) が次のように言及している。

またPorter (1977) は、この種の第2言語習得研究でデータ収集のために多用されるBMSの妥当性を検討した。彼は英語を母語として習得している11人の子供を対象に、BMSを使ってデータを取り、各形態素の正確さの順位を求めた。得られた順位は de Villiers & de Villiers (1973) で確認された順位と異なり、第2言語習得において主張される自然な順位とも異なっていた。このことから、Porterは、DulayやBurtらの研究において明らかとなった、第2言語としての英語の習得における一定の形態素習得順位は、BMSという特定のデータ収集法を使ったがゆえに現れた順位であり、この意味においてBMSの造り出した「人工物」であると結論する。(p.40, ll.7-15)

また山岡の前掲書によれば、Brownと同じようにMLUを使った習得順位の調査で、日本人学習者を対象にした次のような調査もある。Hakuta(1974)である。

彼が長期的に観察した被験者は日本人の子供1人である。この子供は約5歳でアメリカに渡り、自然な環境で英語を第2言語として習得している。観察期間は約1年間である。この習得順位は、一般的に主張されている自然な順位と異なっている。両者で際だって順位が異なっているのは、複数形と冠詞である。Hakutaはこの原因を日本語の干渉に求める。つまりどちらの形態素も日本語において該当する文法指標がないため、その習得に苦労すると説明できる。DulayやBurtらが主張する自然な習得順位は、学習者の母語の違いにもかかわらず一貫して現れることを考えれば、Hakutaの研究は母語からの干渉による影響が生じることを示しており、大きな意味を持つ。(p.40, ll.17-32)

注：MLU (Mean Length of Utterance) は、言語発達の進度を見る客観的指標の1つである。MLUの算出は、ある子供のある時点における自然な発話をおよそ100ほど集め、個々の発話の形態素の個数を数え、その総計を発話数で割ることによって行う。

このMLUというデータの集め方も、時期や年齢や生活環境によって左右されるのではないかと思われる。また、たった1人分のデータのため、これを一般化することはできない。そこで、Makino (1981) は、中学生の複数生徒による調査を発表した。この調査には33の教室から1000人以上の中学生が参加した。以下は同じく山岡の前掲書からの引用である。

日本人の中学生を対象とした大規模な研究においても自然な習得順位と高い相関を持つ順位が確認された (Makino 1981)。この研究は、教室外では目標言語に触れることのないいわゆる外国語としての学習環境にある学習者を被験者としている点と、データ収集法が絵を基にした筆記法である点に特徴がある。この時期に行われた大部分の研究は、おもに自然な環境で第2言語として英語を習得している者を研究対象とし、BMSを用いてデータを収集しているが、そこで確認された順位が、この日本人中学生を被験者とした研究においても現れ

ることは、主張されるところの自然な順位がいかに強固なものであるかを示していると解釈される。(p.41, l.12-p.42, l.2)

Makinoの調査は被験者の生徒数が1000人以上と大変多い。教室外では目標言語に触れることのない学習環境に生徒がいる。この多人数の結果についても、これまでのような形態素を分析したものである。以下、同じく山岡（1997）から引用する。

上のような主張にもかかわらず、外国語として英語を学習している日本人を被験者とした研究で、Makino（1981）とは異なった結果を報告したものがいくつかある。例えば、Nuibe（1986）は日本人中学生を対象とした単文の英訳テストによる結果から、Hakuta（1974）と似かよった順位を報告しており、Shirahata（1988）は日本人高校生に対して行った口頭インタビューから、同様の結果を得ている。またTomita（1989）も、日本人高校生の被験者に絵の内容を筆記によって描写する作業課題を与え、その結果から同様の順位を導いている。これらの研究の共通点は、冠詞と複数形の習得が自然な順位に比べて遅れる点にあり、これがHakutaとの類似性を生む要因となっている。(p.42, ll.3-12)

このように冠詞と複数形の習得に限った調査にしたために、口頭インタビューや絵の描写などという調査方法が取られた。このように定冠詞や複数形の習得が難しいことを証明するために、日本でも多くの研究者が実験を行ったことが分かった。しかし、やはりTENSEやASPECTからの調査は無く、外国の第2言語習得研究をそっくりそのまま日本で行ったに過ぎないことに物足りなさを感じた。

3) 疑問点③ 母語話者の否定文の発達段階と、自分の調査 He not play tennis. は同じ習得順序と言えるのか

前掲書『第2言語習得研究』第2章に「構造の発達順序」とあり、その中には否定文と疑問文についての習得研究について次のように書かれている。

<第1言語習得における構造発達順序>

70年代の第2言語習得研究は、英語の否定文と疑問文の発達段階の分析を1つのテーマとしていたが、これを触発したのは、60年代に行われた英語を母語として習得する子供に対してなされた同じ観点からの研究である。Klima & Bellugi(1966)は、お互いに何の関係も持たない3人の子供の発話を分析し、この2つの構造の発達段階を調べた。その結果、いずれの構造に関しても、3人に共通した一定の発達段階が確認された。

ある特定の文構造が発達する過程において示すこのような一定の発達段階は、発達順序 (developmental sequence) という用語で一般的に呼ばれ、形態素の習得順位 (acquisition order) と区別される。(p.44, ll.2-11)

上に、「形態素の習得順位と区別される」とある。否定文と疑問文の習得順位は、このように区別して研究されていた。どうして区別されているのかについては、書かれていない。これに関連して、自分の調査結果の「単純形について」で、本論文で次のように書いた。

①（単純形、現在、否定）について。1年生でも早い時期に学習する内容だが、誤答を見るとdoes がなかったりdon't であったり、3単元のsをつけたままになっているなどの、間違いにバリエーションがある。一番多い間違いは He not plays tennis. であり、英語母語話者が英語を身につけていく段階と類似していることが伺える。なぜこの単純形・現在・否定文での間違いがこれほど多いのか。なぜ定着しにくいのだろうか。

③（単純形、過去、肯定）の間違いが一番少ないにもかかわらず、表上では隣に位置する④（単純形・過去・否定）の間違いが全体で一番多いことが驚きである。これも英語母語話者が英語を身につけていく発達段階と類似していることが伺える。

この①と③について、母語話者の習得順位と似ていると考え、山岡『第2言語習得研究』から、そ

の根拠となる説明文を探していた。そして、以下の説明を見つけた。

否定文の発達に関しても、Schumann (1979) が一連の研究を概観し、第1言語としての英語習得とほぼ同じ発達段階が第2言語習得にも見られることを確認している。つまり、第1段階では、否定辞が平叙文の前か後ろに付加される外的否定の形が使われ、第2段階になると、否定辞が中に取り込まれる内的否定が現れる。この段階ではdon'tも使われるが、これはまだ単一の否定辞として扱われており、その構成素に分析されていない。(p.46, ll.14-19)

第1言語習得における英語否定文の発達段階

段階	MLU	構造	例
I	1.8	no+S or S+no	No heavy. Wear mitten no.
II	2.3-3.5	NP+neg+VP	I can't catch you. He no bite you.
III	4.0	NP+aux+neg+VP	I didn't did it. You don't want some supper.

(Taylor 1976:215-217 に基づく)

しかし、この否定辞は、noであり、自分の調査ではnotである。単語が違っているが、付加する位置や、文章中の意味においては同じである。自分の調査紙には「否定(notがある文)」というヒントが載っているために、noという語は出てきていないが、ヒントが無かったのならば、noが誤答にあったのではないかと思われる。

3 中間総括 — この調査から今後の指導に生かしていきたいこと

今回の調査で、肯定文が全て上位に、否定文・疑問文が全て下位に位置している。簡単な文章であったにもかかわらず、このような結果になった。⑮ (完了形・現在・肯定) が、① (単純形・現在・否定) よりも順位が良いなどは、調査前には思いもしなかった。

通常の会話では、片方が質問して、もう片方が答える。ということは、会話を続けるためには、疑問文が作れないと困ってしまう。そこで、授業ではどのように会話活動をしているかを振り返ってみようと思う。

授業での会話活動では、教師が会話のモデルを作ってきて、会話相手を変えながら練習する。その会話文は、生徒が多少アレンジできるようになってはいるが、主となる疑問文は変えられるとしてもまるでパターンプラクティスのような変化しかできない。限られた時間の中での会話活動のため、生徒が自由に会話文を作成する時間はほとんどない。

しかし、教師によって与えられた疑問文を用いての会話は、その場ではスラスラと話せるようになったとしても、実践的な力がついているとは思えない。ある場面を提示して、「このような場面で、あなたならどのように相手に尋ねますか。尋ねられたら、どのように答えますか」というような発問の方が、良いのではないだろうか。

また文の成り立ちを教えるとき、「記号研方式」を用いると良いのではないか。というのも、否定文や疑問文を教えるとき、記号が頭を整理してくれると思うからである。記号を使うことで、疑問文にするときの「たすきがけ」で、be動詞を文頭に持っていく作業が、左半丸を文頭に持っていくだけなので分かりやすい。

また否定文でnotをつけるときに、notをつける位置が左半丸と右半丸の間なので、間違いを最小限にとどめることができるからである。中学生程度の文法はもちろんのこと、高校や大学のように英文が難しくなればなおさら記号で分かりやすく教えることができる。基本を徹底させるべく、記号で規則的に覚えさせることが大切であると考えます。